

平成十七年度後期企画展示 肥後の至宝展Ⅳ

神のすむ郷

阿蘇のものがたり展

「あなたは阿蘇をご存じですか？」



神のすむ郷

阿蘇のものがたり展

あなたは阿蘇をご存じですか？

開催にあたって

熊本県立装飾古墳館では、『肥後の至宝展』と銘打つ展覧会を本館の企画展示として平成14年度からシリーズ化しました。このシリーズは、県内外から来館いただく方々に熊本の優れた考古資料等を紹介し、熊本の歴史のすばらしさを実感していただくための展覧会です。平成14年度は、「新発見・再発見 菊池川の古代遺跡」で菊池川流域を、平成15年度は、「球磨楽展～球磨の考古と歴史に遊ぶ～」で球磨地域を、平成16年度は、「宇城語展～貝塚からのメッセージ～」で宇城地域を紹介してきました。

平成17年度は、これらの成果を受けて、肥後の至宝展Ⅳ『神のすむ郷 阿蘇のものごたり展～あなたは阿蘇をご存じですか？～』として開催いたします。

自然豊かな阿蘇くじゅう国立公園の中にあり、歴史や伝統文化が残る阿蘇地域。阿蘇に残る神話や祭、雄大な自然や四季折々の景観など、現在も国内外から多くの人々が、その魅力に惹かれ阿蘇を訪れています。

そんな阿蘇は、人々に様々な恩恵をもたらす一方、噴火など畏敬の念を抱かせる神秘的な存在として、古くから崇められてきました。阿蘇神社の神々や多くの神話など、神を抜きにして阿蘇を語ることはできません。今回は、そんな神々に仕えてきた阿蘇氏を中心に紹介しました。

また、多くの人々が阿蘇の魅力に惹かれて訪れているように、阿蘇には、地形や地質の不思議さ、自然の豊かさ、神話の神秘さ、民俗や祭祀の特有さなど多くの魅力があります。そうした阿蘇の魅力についても、自然、民俗など様々な切り口で紹介しました。

阿蘇の歴史の奥深さ、自然の豊さ、民俗や祭祀など、その魅力を感じていただきながら、皆様の故郷へ寄せる思いや郷土愛を再度温めなおしていただく機会になればと思います。

最後になりましたが、本展覧会の開催にあたり、貴重な資料の出品や写真の提供などに御協力をいただきました関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成18年1月24日

熊本県立装飾古墳館長 小田 信也

例 言

- 1 本書は、平成17年度後期企画展示 肥後の至宝展Ⅳ「神のすむ郷 阿蘇のものがたり展～あなたは阿蘇をご存じですか?～」の展示解説図録である。
- 2 図録構成と展示構成は、一部異なるところがある。
- 3 本書に掲載した写真・挿図については、写真・挿図毎に、写真の提供先、転載した図の報告書名を明示している。
- 4 本書は、学芸課 木崎康弘の指導のもと、角田賢治が執筆した。ただし、ゾーンⅢについては、梶原宏之（阿蘇たにびと博物館長）が執筆した。編集については、主に角田がこれにあたった。
- 5 展示および本書の作成にあたり、多くの機関並びに個人から御指導と御協力をいただいた。巻末に記し、深く感謝申し上げる。
- 6 会期中に記念講演会及び古墳館集中講座を実施する。

●記念講演会 平成18年2月5日

「阿蘇大草原の成り立ち」 杉山真二氏

「長目塚古墳調査あれこれ」 隈 昭志氏

●古墳館集中講座

- | | | |
|-----|-------|--|
| 第1回 | 1月29日 | 「赤い谷と黒い川」 宮崎敬士氏
「阿蘇の古墳文化」 野田拓治氏 |
| 第3回 | 2月19日 | 「阿蘇の祭と芸能」 國本信夫氏
「年の神の祭について」 佐藤征子氏 |
| 第4回 | 2月26日 | 「熊本山岳史考」 矢加部和幸氏
「阿蘇の動植物」 坂梨仁彦氏 |
| 第5回 | 3月5日 | 「阿蘇の水と恵み」 田中伸廣氏
「阿蘇火山と人々のかかわり」 池辺伸一郎氏 |
| 第6回 | 3月19日 | 「二本木前・祇園遺跡について」 水野哲郎氏
「阿蘇氏と中世城」 大田幸博氏 |

目 次

開催に当たって	2
例 言	3
目 次	4
ゾーンⅠ「プロローグ」	5
ゾーンⅡ「神に仕えし猛者ども」	7
コーナー1「神に仕えし大宮司」	10
浜の御所とその盛衰11／語り継がれた館14／南郷大宮司館15／墓の主は？～屋敷墓～17／木簡が語る こと17／館でのくらし18／石鍋一個で牛一頭22／広がる耕地23／器が語る大宮司24／京の都と白 色土師器28／お茶道具29／大宮司の終焉30	
コーナー2「権勢の源流」	31
中通ものがたり31／長目塚古墳が語るもの32／阿蘇の国造35／弥生のムラ37／弥生のボタン41	
コーナー3「赤き土、硬き鉄」	42
ありあまる赤き土42／求められる赤き土43／清めの赤き土45／豊富な硬き鉄46／求められる硬き鉄 49／弥生の鍛冶屋？49	
ゾーンⅢ「阿蘇の魅力～阿蘇に生きる～」	51
コーナー1「草原と危機」	52
貴重な動植物の宝庫52／草原を維持してきた阿蘇の人びとの暮らし53／危機に瀕する草原55	
コーナー2「火を制する」	56
お池さん参り56／火の神様、火の仏様57	
コーナー3「自然の脅威と恩恵」	58
山汐と地下水58／大霜と鬼ハ60／大風と風祭り61／ヨナと里芋61／寒冷地ならではの食文化62	
ゾーンⅣ「エピローグ」	64
関係略年表	65
展示資料目録	66
主要参考文献	70
協力機関及び協力者	70

ゾーンI

プロローグ

有阿蘇山 其石無故火起接天者
俗以為異 因行禱祭

「隋書」倭国伝

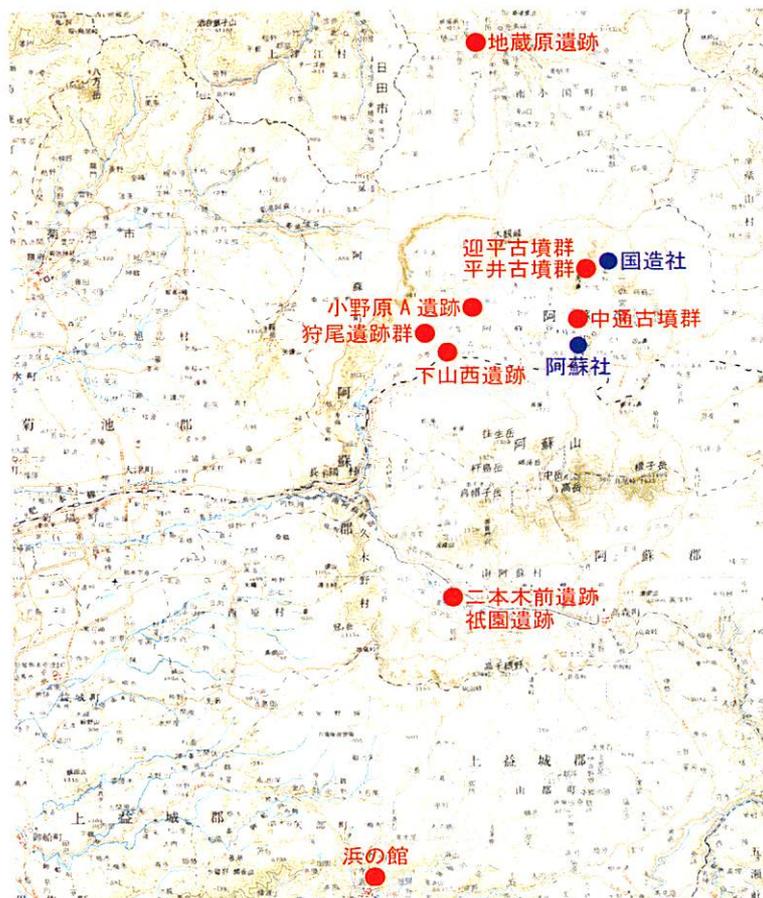
神のすむ郷 阿蘇へようこそ

「阿蘇山あり。其の石、故なくして火起こり、天に接すれば、俗以て異と為し、因って禱祭を行う」『隋書』倭国伝

現在も噴煙をあげる阿蘇。その姿は、約1400年前に編纂された古代中国の史書『隋書』倭国伝にも登場しています。そこには、阿蘇の噴火を畏れ、祭祀を行ったことが記されています。このように、阿蘇の噴火は天変地異のもととして神格化され、神のすむ山として、古くから人々の信仰の対象となっていました。そこからは、多くの神話が生まれ、今なお語り継がれています。

阿蘇の数十万年に及ぶ火山活動は、世界に誇る雄大で美しいカルデラをつくり、さらには中九州の地形をも形づくってきました。「阿蘇くじゅう国立公園」にも指定されている阿蘇は、その自然の中で、貴重な動植物を育み、また、湧水や温泉などの恩恵をもたらし、人々のくらしを見守っています。

今回は、「神」と「魅力」をキーワードに阿蘇を旅してみたいと思います。



ゾーンII

神に仕えし
猛者ども

肥後の国。關宗の県。県の坤方二十余里に一つの禿山がある。
關宗の岳という。頂上に神秘的な沼がある。
石の壁が垣を形づくっていて、
「筑紫風土記逸文」

ゾーンII

神に仕えし猛者ども

古来より、阿蘇は、人々に畏敬の念を抱かせる存在、すなわち「神」として崇められてきました。そうした中で、健甕龍命が生み出され、壮大でロマンに満ちた伝説や神話も創り出されました。

一方、阿蘇神社は、健甕龍命を一宮、その妻、阿蘇都比咩命を二宮として、十二の神々を祀っています。平安時代の「延喜式」神名帳にもその名を見ることができ、歴史のある神社です。阿蘇神社の大宮司職を代々受け継いできた阿蘇氏は、まさしく「神々の末裔」と呼ぶにふさわしい存在です。中でも中世に活躍した阿蘇大宮司は、神々を祀る宮司として、また肥後を代表する武士団の棟梁として、その権勢を誇っていました。

そうした阿蘇氏の源流は、阿蘇谷北東部に点在する大規模な古墳群に葬られた阿蘇国造である「阿蘇の君」に見ることができます。さらには、豊富なベンガラや鉄資源を背景に栄えた阿蘇谷の弥生ムラにもその姿をおぼろげながら見ることができます。

「神に仕えし猛者ども」では、中世阿蘇大宮司の活躍やその源流について、「神に仕えし大宮司」、「権勢の源流」、「赤き土、硬き鉄」の3つを切り口に紹介していきたいと思えます。

No image



「権勢の源流」

「神に仕えし大宮司」



「赤き土、硬き鉄」



たていわたつのみこと がいりんざん。 けやぶ
大明神さん（健磐龍命）が外輪山を蹴破られたこと

むかしむかし、おおむかしのことですが、今の阿蘇谷一帯は満々たる大湖水でした。阿蘇大明神（健磐龍命）さんは湖水の岸、今の外輪山に立って湖をご覧になっておられましたか、

「広い湖だ。こんな広いところをあそばしておくのはもったいない。この水をどこかへ流し出したいものだ。きっと広い田んぼができるだろう。」

とおっしゃって湖の周りをぐるっとおまわりになりました。そして西の方の外輪山の上にお立ちになると、

「どうも、この付近が湖の尻にあたるようだ。ここを蹴破って水を流してやろう。なあに雑作ぞうさもないことだ。」

とつぶやかれると、「エイッ」とかけ声もろとも力いっぱい、そこを蹴られました。しかし破れません。「エイッ」「エイッ」、ふた蹴り、み蹴りされますが、まったく破れません。大力無双の大明神さんです。今まで一度も破れぬことはなかったのに、そこはびくともしません。

大明神さんは、山の上に登って山の外側をご覧になりました。なるほど破れないのも道理、そこは山が二重ふたえになっていました。

「うーん、ふたえだったか。」

大明神さんは、苦笑されました。その時からそこを「フタエノトウゲ（二重峠）」と呼ぶようになりました。

「どこかよいところはないか。」

大明神さんは南の方に探しに歩かれましたが、

「ここだ。ここがよい」

と叫ぶと、「エーイッ」と蹴られました。するとどうでしょう。そこはひと蹴りでスカッと破れて湖水がどっと滝をなして流れ出しました。この流れが今の白川です。

蹴破られた所を「タテノ（立野）」と言います。大明神さんが立った所だからそうです。

その時、大明神さんが蹴破られた所が「スガルガ滝（数鹿流滝）」で、スカッとあいた滝だからこんな名がつけました。また、大明神さんが蹴破られた時、足の指先についた土が落ちた所が「ユビヅカ（指塚）」、蹴とばされた土くれが落ちた所が「ツクレ（菊池郡菊陽町津久礼）」です。土くれのことを土のヅクレというのが津久礼になったわけです。その時、大きな土のかたまりが落ちたのが「オオヤマトシマ（熊本市小山町戸島町）」で、小石がとんで落ちた所が「コイシ」すなわち「合志（菊池郡合志町）」だそうです。

この他にも「大明神さんのナマズ退治」「鬼八伝説」「根子岳ねこだけのネコ」など、阿蘇には、多くの壮大な神話や伝説が残っています。

コーナー1 「神に仕えし大宮司」

No image

御幣を火口に投げ入れる宮司

「肥後の国の開宗（あそ）の嶽。嶽の坤方二十余里に一つの禿山がある。開宗の岳という。頂上に神秘的な沼がある。石の壁が垣を形づくっている。青い淵は、百尋で、白練をしいて底としている。いろどる色は五色で、黄金をひろげたようにきらきらしている。天下の靈奇が萃となってひらいたごとくである。時々水がいはいに渦ちて、南から溢れ流れて白川に入ると、多くの魚は酔って死んでしまう。土地の人は苦水と名づける。その岳の形たるや、なかば天を切つてそばだち、四つの裾野はひろがって嶽をつつんでいる。石に触れて興起する雲は五岳の最首位となり、湧き出る泉は分かれ流れ群川の巨大なる源である。大いなる徳は巍々として高く、まことに人間世界の唯一つのものである。奇形は奇々としてはるかに、まことに天下にならぶものがない。場所は国の中心にある。それ故に中岳という。いわゆる開宗の神宮とはこれである。」
『筑紫風土記逸文』

神秘の沼とされた阿蘇の火口湖。その異変は、国家的災いの前兆として畏れられました。そのため、阿蘇氏は、その異変を朝廷へと報告し、それを鎮めることを大切な仕事としていました。現在も行われている阿蘇山火口への奉幣などの祈禱は、その名残であり伝統です。

阿蘇神社

阿蘇市一の宮町にある神社（中世は「阿蘇社」、近世は「阿蘇宮」と呼ばれていた）。現在は、第91代の阿蘇惟之氏が宮司を務めています。

阿蘇神社から北へ4kmほど行った所には、健甕龍命の子、遠瓶玉命を祀った国造神社があり「北宮」と呼ばれています。

おんだ祭、風船祭、火焚き神事など、阿蘇神社や国造神社、雷神社の農耕祭事は、「阿蘇の農耕祭事」として国の重要無形民俗文化財に指定されています。



阿蘇神社楼門（阿蘇神社提供）

浜の御所とその盛衰

浜の御所は、旧矢部町、現在の上益城郡山都町にある阿蘇大宮司の館跡です。阿蘇氏が、南郷谷から矢部へと勢力を広げた時に本拠地として造った館です。

浜の御所がいつ頃造られたかは、はっきりと分かっていません。『阿蘇家文書』では、南北朝期の大宮司これとき惟時の頃に登場していますから、その頃から戦国期の1586（天正14）年頃、島津氏に攻められ、浜の御所が焼失するまでの間、代々、阿蘇大宮司の本拠地として栄えたのでしょう。



浜の館出土品（熊本県教育委員会提供）

「浜の館」

1974（昭和49）年の県立矢部高等学校の校舎建て替えに伴う調査で、青磁や白磁、中国製染め付けなどの陶磁器類、礎石建物跡や庭園跡などが見つかりました。庭園の池のほとりには、中国南部、華南地方で作られた三彩鳥型水注など対をなす品々が埋納されていました。これら21点は、現在、国の重要文化財に指定されています。

調査を担当した桑原憲彰氏（のちの熊本県立装飾古墳館長）は、それらの内容から、文献上に出てくる阿蘇大宮司の館に違いないと考え、「浜の館」と名付けました。



浜の館礎石建物跡

阿蘇大宮司とは・・・

701（大宝元）年の大宝律令の制定により、中央による地方支配が本格化しました。神官である阿蘇氏は肥後14郡の一つ阿蘇の「郡司」に任命され、「国司」に支配されることとなりました。そうした中で、阿蘇氏は、神官に加え、武士団の長である大宮司職になることを望み、朝廷から認められることとなります。これにより、国司の支配下に置かれていた阿蘇は、大宮司の特権として、神社の祭司と造営に加えて、社領（神社の領地）も管理することができるようになりました。史料上でその職名が初めて見られるのは、1137（保延3）年の「大宮司宇治惟宣」です。



1. 三彩鳥型水注：浜の館
(熊本県教育委員会提供)



2. 三彩鳥型水注：浜の館
(熊本県教育委員会提供)



3. 三彩牡丹文瓶：浜の館
(熊本県教育委員会提供)



4. 緑釉瓶：浜の館
(熊本県教育委員会提供)



5. 緑釉陰刻牡丹文水注：浜の館
(熊本県教育委員会提供)



6. 緑釉水注：浜の館
(熊本県教育委員会提供)



7. 染付牡丹唐草文瓶：浜の館
(熊本県教育委員会提供)



8. 白磁小置物(猿)：浜の館
(熊本県教育委員会提供)



9. 白磁小置物(獅子)：浜の館
(熊本県教育委員会提供)



10. 玻璃坏：浜の館
(熊本県立美術館提供：藤本健八氏撮影)



11. 青磁合子：浜の館
(熊本県立美術館提供：藤本健八氏撮影)



12. 黄金延板：浜の館
(熊本県立美術館提供：藤本健八氏撮影)

語り継がれた館

昔から、浜の館付近では、阿蘇大宮司の館跡があったという伝承が語り継がれていました。江戸時代に書かれた『肥後國誌』にも「陣ノ内濱御所迹、濱ノ御殿トモ云、長福寺村陣ノ内ト伝所ノ北高クシテ上へ平カ也是ヲ城ノ平ト云、南ハ畑川ヲ隔テ岩尾城ナリ（後略）」と浜の館が記されています。また、この辺りには「お花畑」「弾正さん」「御前渡し」など、館を思わせる地名が残っていました。しかし、実際にこの地域で、それらを裏付けるような品々は見つかっておらず、伝承の域をでることはありませんでした。そうした中で、校舎建て替え工事に伴った調査で、伝承を裏付ける建物跡や庭園跡、陶磁器などの品々が次々と確認されました。まさに浜の館がよみがえった瞬間です。

数百年の間、形をかえながらも地元の人々の間で語り継がれてきたことは、まぎれもない事実だったのです。

地名に見る浜の館

浜の館周辺には、館の存在を思わせる地名も多く残っていました。報告書『浜の館』からそのいくつかを紹介します。

- 「お花畑」 浜の館の庭園跡に残っていた地名です。
- 「弾正さん」 「肥後國誌」に「館跡ノ南ノ方ニ弾正杉ト云ル大木ノ杉一株アリ」と記されています。そこには、二段の石積みをした一間半四方の基壇があり、墓石はなく杉の大木があったようですが、現在は残っていません。
- 「金の鶏」 この場所には、金の鶏が埋まっており、毎年、年の晩には鳴くと言われていました。
- 「御前渡し」 1762（宝暦12）年、轟川に橋がかかるまで、徒歩で渡っていて、大宮司も往来に利用していたので、この名が付けられたということです。



(『浜の館』の図を基に作成)

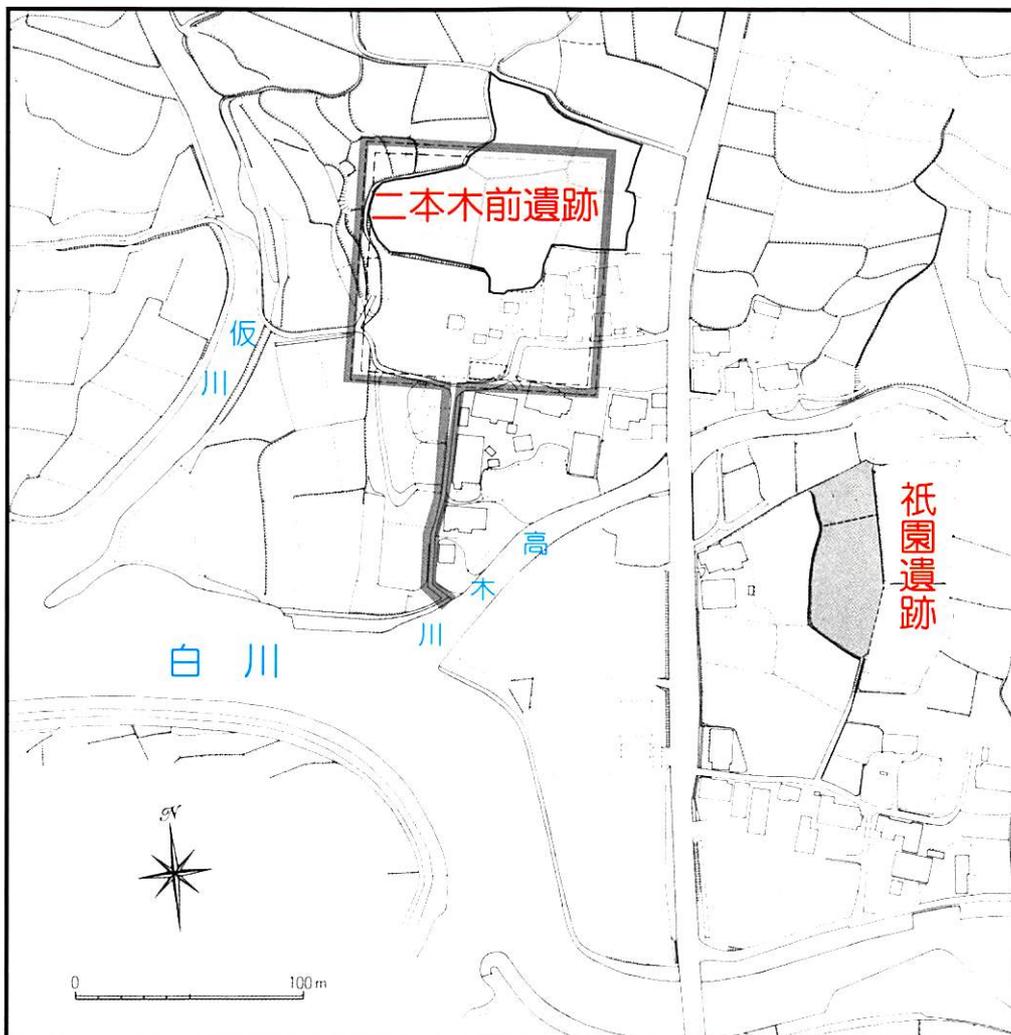


南郷大宮司館

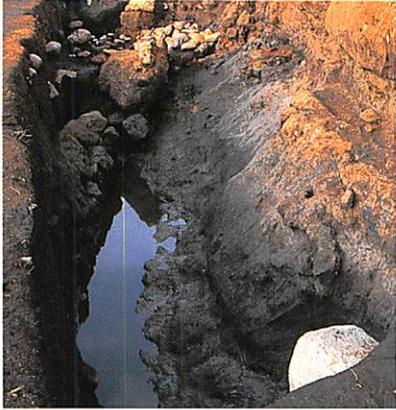
阿蘇氏は、阿蘇谷から中央火口丘南側の南郷谷に本拠地を移しました。その年代は、定かではありませんが、『吾妻鏡』の1181（養和元）年2月29日に「南郷大宮司惟安（泰）」と、当時の阿蘇大宮司「惟泰」がその記述に見られることから、平安時代の終わり頃のことであろうと考えられています。その大宮司の館が南郷大宮司です。その場所については、直接的な証拠はありませんが、旧白水村、現在の阿蘇郡南阿蘇村にある二本木前遺跡と、隣接する祇園遺跡がもっとも有力であると考えられています。

二本木前遺跡は、南に白川、その支流の仮川と高木川に東西を挟まれた丘陵地にあります。調査は、館の一部のみであったため、その全容を知ることはできませんでしたが、鎌倉時代の約100m四方の濠に囲まれた館跡であったことを明らかにしました。その濠は、幅5m、深さ2mもあるものでした。囲まれた屋敷内からは、数十棟の掘立柱建物跡や井戸、墓などが見つかっています。

近くの湧水から水を引いていた濠からは、たくさんの木製品が見つかりました。また、屋根材として使われる檜皮もたくさん見つかったため、檜皮葺の建物または檜皮葺の板塀があったことも明らかになりました。



（『二本木前遺跡』の図を基に作成）



①濠跡（西側）
（熊本県教育委員会提供）



②濠跡（北側）
（熊本県教育委員会提供）



③濠跡（北東隅）
（熊本県教育委員会提供）



二本木前遺跡全景
（熊本県教育委員会提供）



④井戸跡
（熊本県教育委員会提供）



⑤掘立建物柱跡
（熊本県教育委員会提供）

墓の主は？～屋敷墓～

中世には、一族の守り神として土地の開拓者を屋敷内に埋葬することがありました。この墓のことを「^{やしきばか}屋敷墓」と呼んでいますが、南郷大宮司館跡（二本木前遺跡）の敷地内からも2つの屋敷墓が見つかりました。

ところで、この屋敷墓の主は、いったいだれでしょうか？

このことについて、調査担当者の水野哲郎氏は、次のように考えました。

屋敷墓から見つかった白磁皿3枚と白磁碗1枚、土師器皿1枚。

その陶磁器の年代は、12世紀中頃につくられたもの。

その頃の阿蘇家当主は、『吾妻鏡』に登場する「南郷大宮司惟泰」。

こうしたことから、推論すれば、屋敷墓の主は、惟泰とすることも可能だ。



屋敷墓出土品：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



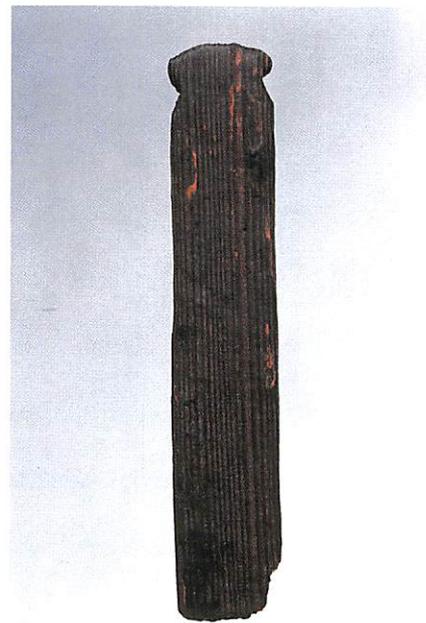
屋敷墓出土状況
(熊本県教育委員会提供)

木簡が語ること

二本木前遺跡の濠からは、「木簡」^{もかん}も見つかっています。当時の荷札である木簡には、7つの文字の痕が残っていました。赤外線カメラ等による調査結果から、水野氏は、次のように推測しています。

木簡には、7つ分の文字の痕が残っていました。最初の文字は「南」と判読でき、7番目の文字は「^{とも}鞆」と読めました。残りの2番目～6番目の文字は、その輪郭から「南郷大宮司殿鞆」とも読めると推測しています。

このことから、『吾妻鏡』に登場する南郷大宮司惟泰が持っていた鞆の収納箱か収納袋に付けられていた荷札ではないかと考えました。



18. 木簡：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)

館でのくらし

南郷大宮司の館でのくらしは、どのようなものだったのでしょうか。

二本木前遺跡や祇園遺跡で見つかった品々から見てみることにします。見つかった品物は次のとおりです。

はきものとしての連齒下駄つなはや差齒下駄。

食膳具としての陶磁器類、木製や漆塗りの椀わんや皿類、土師皿、箸や折敷おし（お膳）など。

調理具としての捏鉢こねばちや搗鉢すりばち、石鍋など。

暖房具としての火鉢かっせきや滑石製の温石おんじやくなど。

また、「生業」に関わるものとしての鍬くわや藁槌わらづちなども見られます。

これらの品々は、当時の武士の暮らしぶりを想像させてくれるものばかりです。



19. 差齒下駄：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



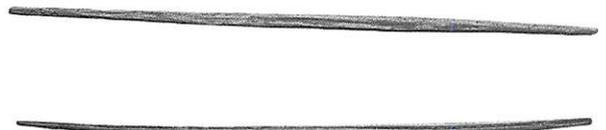
20. 連齒下駄：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



21. 折敷：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



23-1. 漆器椀：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



22. 箸：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



23-2. 漆器椀：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



24. 漆器皿：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



25-1. 木製椀：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



25-2. 木製椀：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



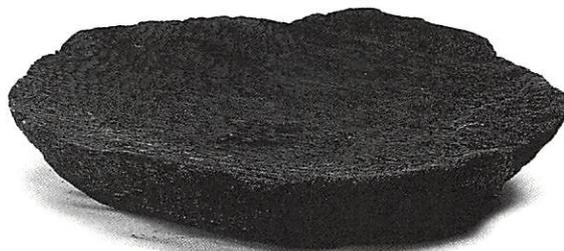
25-3. 木製椀：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



25-4. 木製椀：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



25-5. 木製椀：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



25-6. 木製椀：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



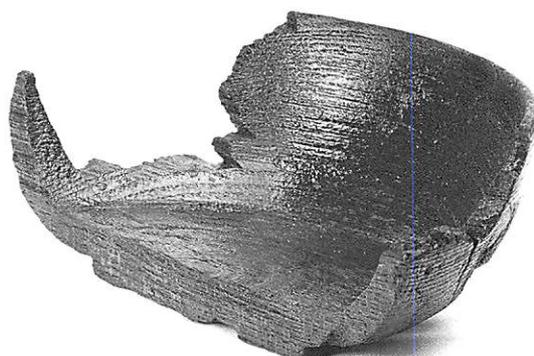
木製椀：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



木製椀：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



木製椀：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



木製椀：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



26. 須恵質播鉢：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



27. 須恵質捏鉢：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



28. 須恵質捏鉢：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



29. 須恵質捏鉢：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



30. 土師器皿・杯：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



31. 瓦質火鉢：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



32. 瓦質火鉢：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



33. 藁槌：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



34. 鋤：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



35. 鋤：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)

石鍋一個で牛一頭

産地が限られる滑石は、保温性があり、しかもとても軟らかく加工しやすい石です。そのため、古くから色々な道具に加工されていました。その一つが石鍋です。

石鍋は、「石鍋一個で牛一頭」と言われるほど貴重品で、主に館跡や寺跡などから見つかっています。このように、貴重な石鍋ですから、壊れた後に再利用されることが多く、温石（携帯用カイロ）や蓋、スタンプなど様々なものに転用されています。



36. 石鍋：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



37. 滑石製仏像：
祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



38. 滑石製人形：
祇園遺跡



39. 滑石製スタンプ：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



40. 滑石製温石：祇園遺跡



41. 滑石製紡錘車：祇園遺跡



42. 滑石加工品（蓋）祇園遺跡



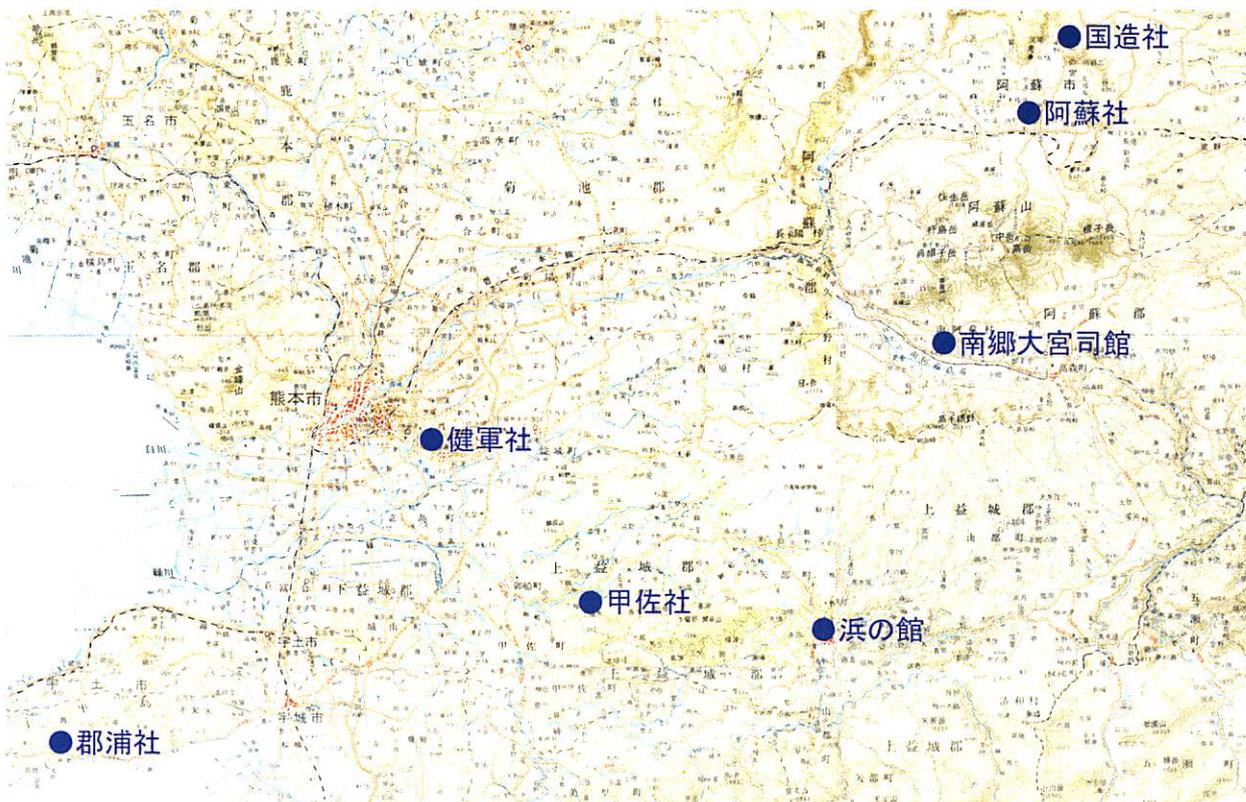
43. 滑石加工品：祇園遺跡

広がる耕地

阿蘇大宮司の勢力は、根拠地の阿蘇谷から、南郷谷、そして外輪山を越え、矢部（現上益城郡山都町）へと広がっていきました。その中で南郷谷においた館が南郷大宮司館で、矢部に進出した時の館が浜の御所です。

南郷大宮司館跡のある南郷谷は、阿蘇谷の一の宮から古坊中を抜け、南へ下った場所に位置しています。さらに、南郷谷から、外輪山の駒返峠を越えると、矢部へと至ります。阿蘇谷から南郷谷、矢部をつなぐこのルートは、現在、国道39号線となっていますが、中世阿蘇氏の盛衰を今に伝える歴史的な道と言えるでしょう。

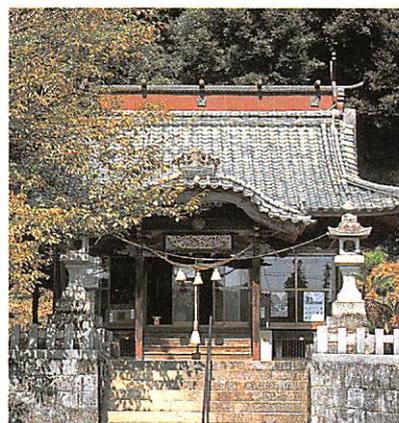
このようにして、阿蘇氏は、阿蘇郡・益城郡を拠点に、飽田郡・詫麻郡・宇土郡・八代郡と肥後14郡のうち6郡の範囲に勢力を広げていきました。阿蘇三摂社、熊本市にある健軍社、上益城郡甲佐町にある甲佐社、宇城市三角町にある郡浦社は、その時の名残です。



健軍神社（熊本市）



甲佐神社（上益城郡甲佐町）



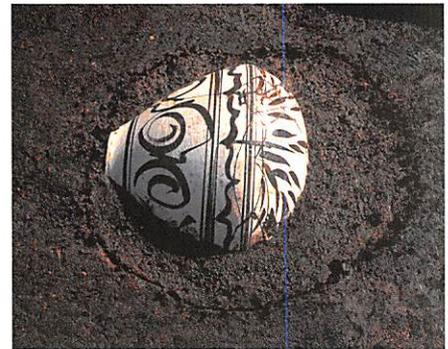
郡浦神社（宇城市三角町）

器が語る大宮司

南郷大宮司館としての二本前遺跡や祇園遺跡からは、中国からの輸入品である陶磁器類がたくさん見つかっています。阿蘇の地で、当時の貿易港博多と同程度のものを持ち得ることができた阿蘇大宮司。ここでは、器をとおして、その権勢を見たいと思います。



44. 磁州窯系鉄絵壺：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



磁州窯出土状況
(熊本県教育委員会提供)



45. 白磁碗：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



46. 白磁碗：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)



47. 白磁碗：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



48. 白磁皿：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



49. 白磁皿：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



50. 白磁皿：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



51. 龍泉窯系青磁坏：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



52. 龍泉窯系青磁碗：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



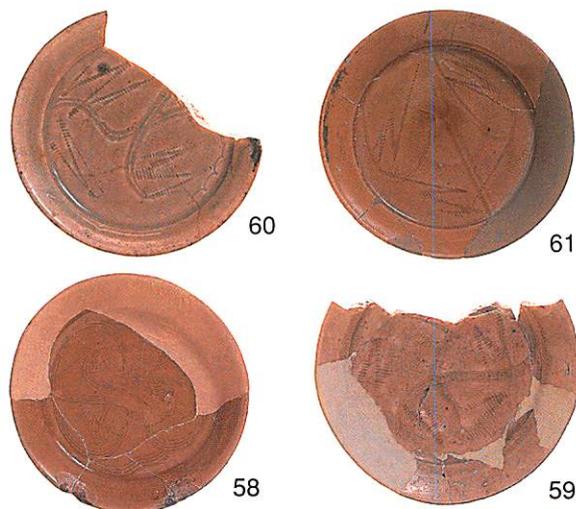
龍泉窯系青磁坏・碗：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



56. 龍泉窯系青磁碗：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



57. 同安窯系青磁碗：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



同安窯系青磁皿・龍泉窯系青磁皿：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



62. 龍泉窯系青磁小壺：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



63. 越州窯系青磁小壺：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



64. 青白磁梅瓶：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



65. 合子（蓋）：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



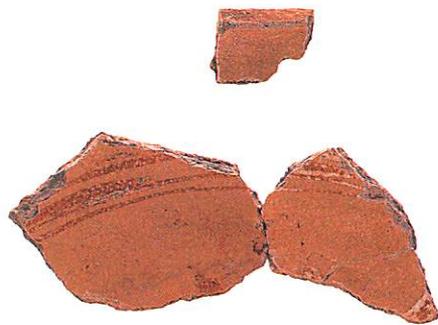
66. 合子（蓋）：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



67. 合子（蓋）：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



68. 合子（身）：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



69. 黄釉盤：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



70. 青磁盤：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



71. 二彩盤：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



72. 黄釉四耳壺：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



73. 褐釉四耳壺：二本木前遺跡
(熊本県教育委員会提供)

京の都と白色土師器

京の都の公家の間では、白色の土師器（はくじょくはじき白色土師器）がとても喜ばれました。またそうした流行を敏感に察知してか、日本各地の武士たちも白色や白っぽい色の土師器を使っていました。日本各地の武士たちが使ったそれらを総称して、京都系白色土師器と呼んでいますが、この京都系白色土師器は、鎌倉時代から室町時代にかけて、各地の代表的な城館跡から見つかっています。

祇園遺跡でも京都系白色土師器が見つかっています。近くには、八坂神社や室町など京都と同じ地名が残っていることもあり、阿蘇大宮司と京の都の何らかのつながりを示すものでしょう。

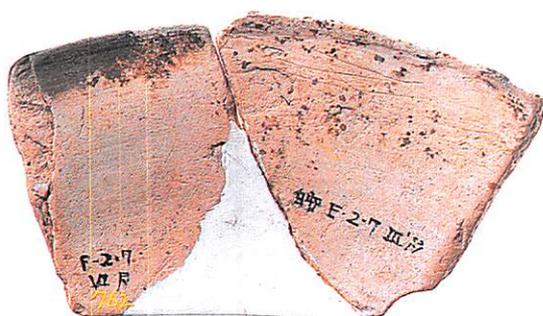


74. 白色土師器皿：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)

75. 白色土師器皿・坏：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



76. 白色土師皿：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



77. 白色土師器碗：祇園遺跡

「高砂」に登場する大宮司友成

お祝い謡（うたい）として知られる謡曲『高砂』は、能楽で有名な世阿弥ぜあみによる室町時代の作品です。阿蘇の神主友成ともなりが京の都に行く途中で、高砂の浦（現在の兵庫県）で相生の松の精である老夫婦と出会うところから始まる、夫婦愛、長寿をあらわした内容となっています。フィクションとはいえ、阿蘇大宮司が脇役として登場するほど、その名の知名度の高さを示すものです。

お茶道具

祇園遺跡では、天目茶碗や茶入、水注などのお茶道具も見つかっています。中国から伝わった喫茶の風習は、京の都から各地へと広がっていきました。南郷の地でも阿蘇大宮司が、茶の湯を楽しんでいた様子が想像される品々です。



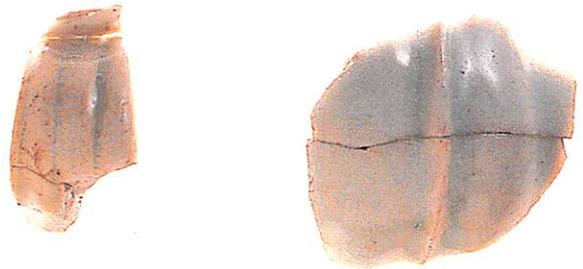
78. 天目茶碗：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



79. 天目茶碗：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



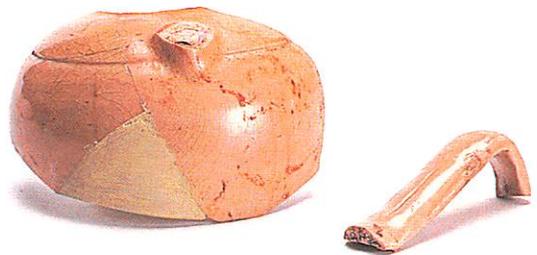
80. 褐釉茶入：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



81. 青白磁水注：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



82. 白磁水注：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)



83. 白磁水注：祇園遺跡
(熊本県教育委員会提供)

大宮司の終焉

阿蘇の神を祀る宮司として、肥後を代表する武士の棟梁として活躍した中世阿蘇大宮司。しかし、1586（天正14）年頃、薩摩の島津氏に攻められた阿蘇大宮司は、館を追われました。こうした混乱の中で、館の池のほとりに隠された宝物が三彩鳥形水注などであると考えられています。

その後、まだ3歳の大宮司^{これみつ}惟光とその弟^{これよし}惟善は、わずかな家来と共に矢部の山中目丸^{めまる}へと身を隠しました。公の場から身を隠したことで、大宮司としての権勢も薄れていくことになりました。惟光は、後に秀吉により自害させられましたが、加藤清正により、弟の惟善が宮司にとりたてられ、阿蘇社（阿蘇神社）は復興することになります。

この時、目丸で幼い惟光兄弟をかくまった山崎家には、現在も阿蘇氏ゆかりの品々が家宝として伝わっています。また、目丸で機会あるごとに踊られている「目丸棒踊」は、幼い兄弟を守るために、目丸の人々が身につけた棒術が形を代えたものとされています。（町指定の無形民俗文化財）



84. 茶入：山崎新教氏蔵



山都町（旧矢部町）目丸



目丸棒踊（山都町教育委員会提供）

コーナー2 権勢の源流



中通古墳群

中通ものがたり

阿蘇外輪山の七鼻の一つ「象ヶ鼻」の南にある小さな美しい山、小嵐山^{しょうらんざん}。その名は、京都の嵐山からの風景に似ていることに由来しています。その小嵐山からは、涅槃像^{ねはんそう}を思わせる美しい阿蘇五岳を背景に、眼下には、阿蘇谷に広がる田園風景を見ることができます。

田園風景の中に、ひときわ目立つ2つの前方後円墳^{かきげづか}。一つが長目塚古墳^{ながめづか}、もう一つが上鞍掛塚A古墳^{かみくらなかとおり}です。この前方後円墳を中心に9基の円墳からなる阿蘇最大の古墳群が中通古墳群です。

この壮大な光景は、後にこの地を治める「阿蘇県主^{あがたぬし}」や「阿蘇国造^{こくぞう}」、中世に活躍する「阿蘇大宮司」の姿を彷彿とさせます。

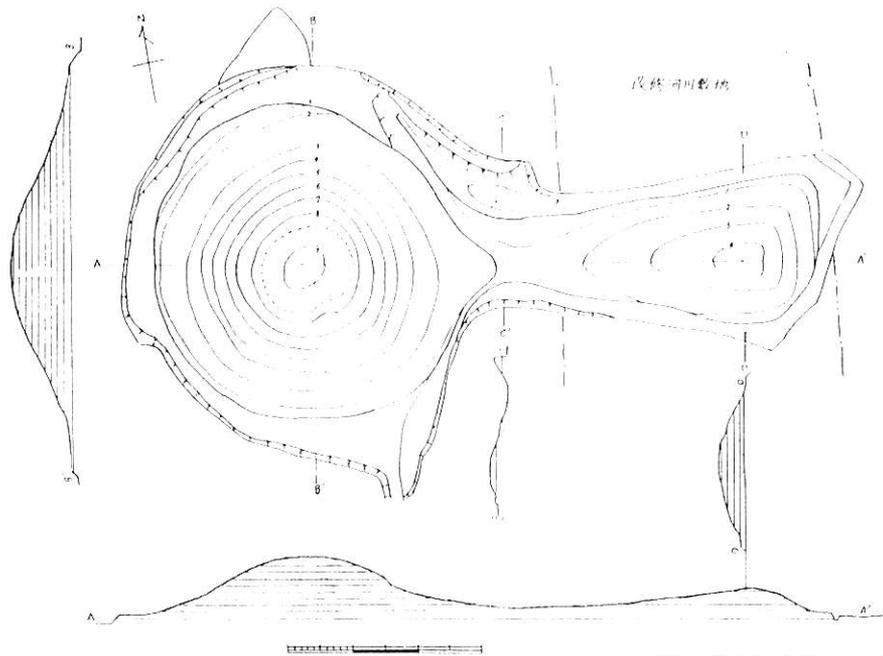


85. 内行花文鏡：長目塚古墳

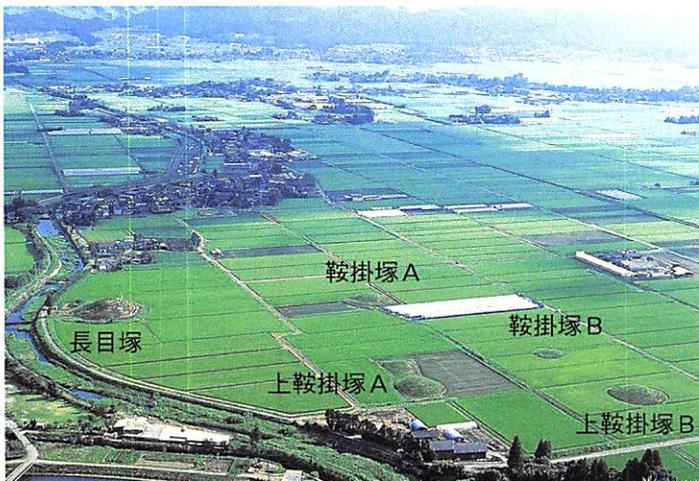
長目塚古墳が語るもの

長目塚古墳は、墳長111.5mと県下最大の墳丘をもつ4世紀末から5世紀初めに造られた前方後円墳です。しかし、1949（昭和24）年、災害復旧に伴う河川改修により前方部を失い、残念ながら往時の姿を見ることができません。

調査では、全体の実測と消失する前方部のみの調査でしたが、そこから埋葬施設であるたてあなしせっかく 竪穴式石槨が見つかりました。赤で塗られた石槨の中には、女性が埋葬され、その首から胸にかけては、勾玉くぐたまや管玉はり、玻璃（ガラス）丸玉、両手首付近にも玻璃丸玉が置かれていました。頭の右側には内行花文鏡、その鏡の上に太刀の柄がのり、体の左側に太刀、その外側に7本の刀子、腰付近に1本の刀子、そして、足の両側には、矢筒に納めたことを窺わせるような鉄鏃の束が副葬されていました。これら貴重な副葬品からも、埋葬された女性は、長目塚古墳の後円部に葬られた人物の近親の人物だと考えられています。



（『阿蘇長目塚』より）

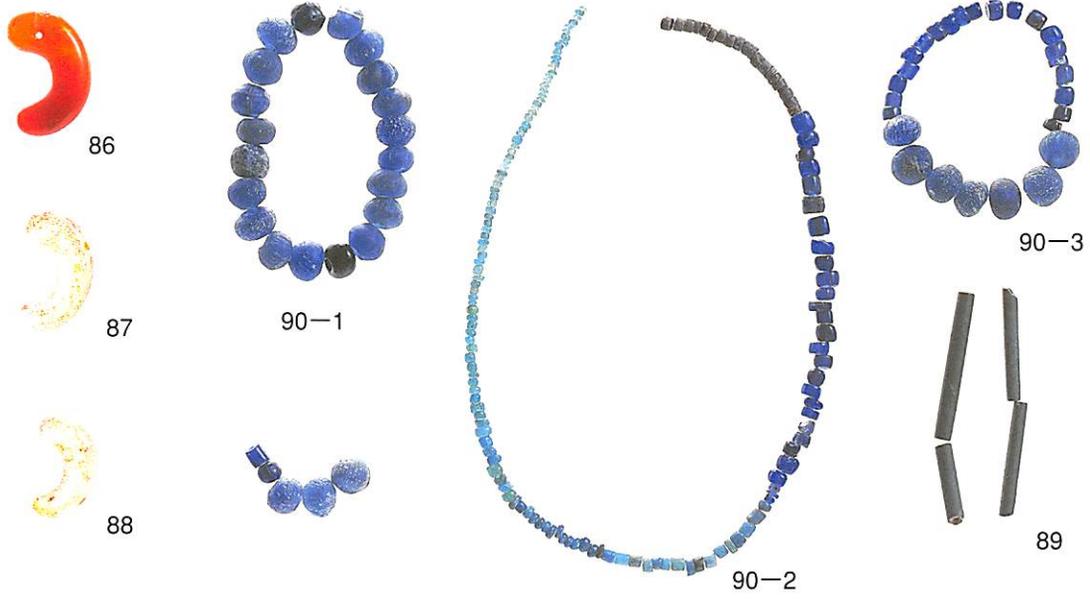


中通古墳群

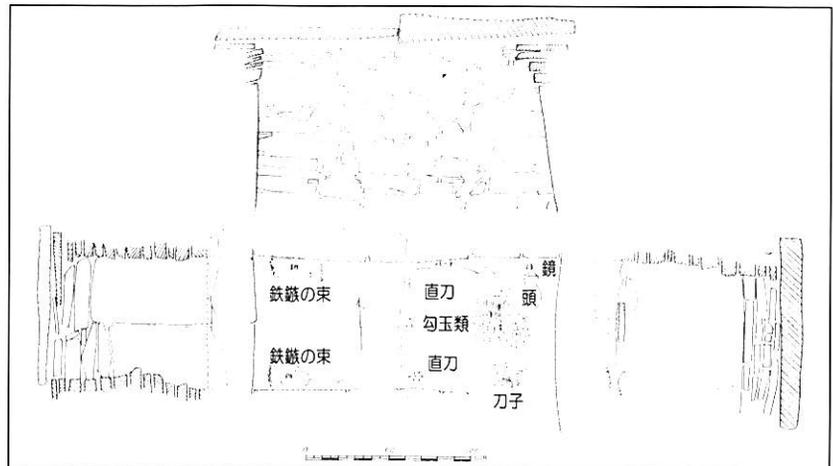
県内の前方後円墳（県内全63基）

	古墳名	所在地	全長	墳長
1	長目塚	阿蘇市一宮町	129	111.5
2	天神山	宇土市野鶴町	—	110
3	岩原双子塚	山鹿市鹿央町	139	107
4	中の城	氷川町野津	121	98
5	スリバチ山	宇土市神合町	—	96
6	向野田	宇土市松山町	—	86
7	姫の城	氷川町大野	114	85
8	藤光寺	玉名市岱明町	—	85
9	院 塚	玉名市岱明町	95	78
10	亀 塚	山鹿市方保田	—	73
	上鞍掛塚A	阿蘇市一宮町	—	65.5

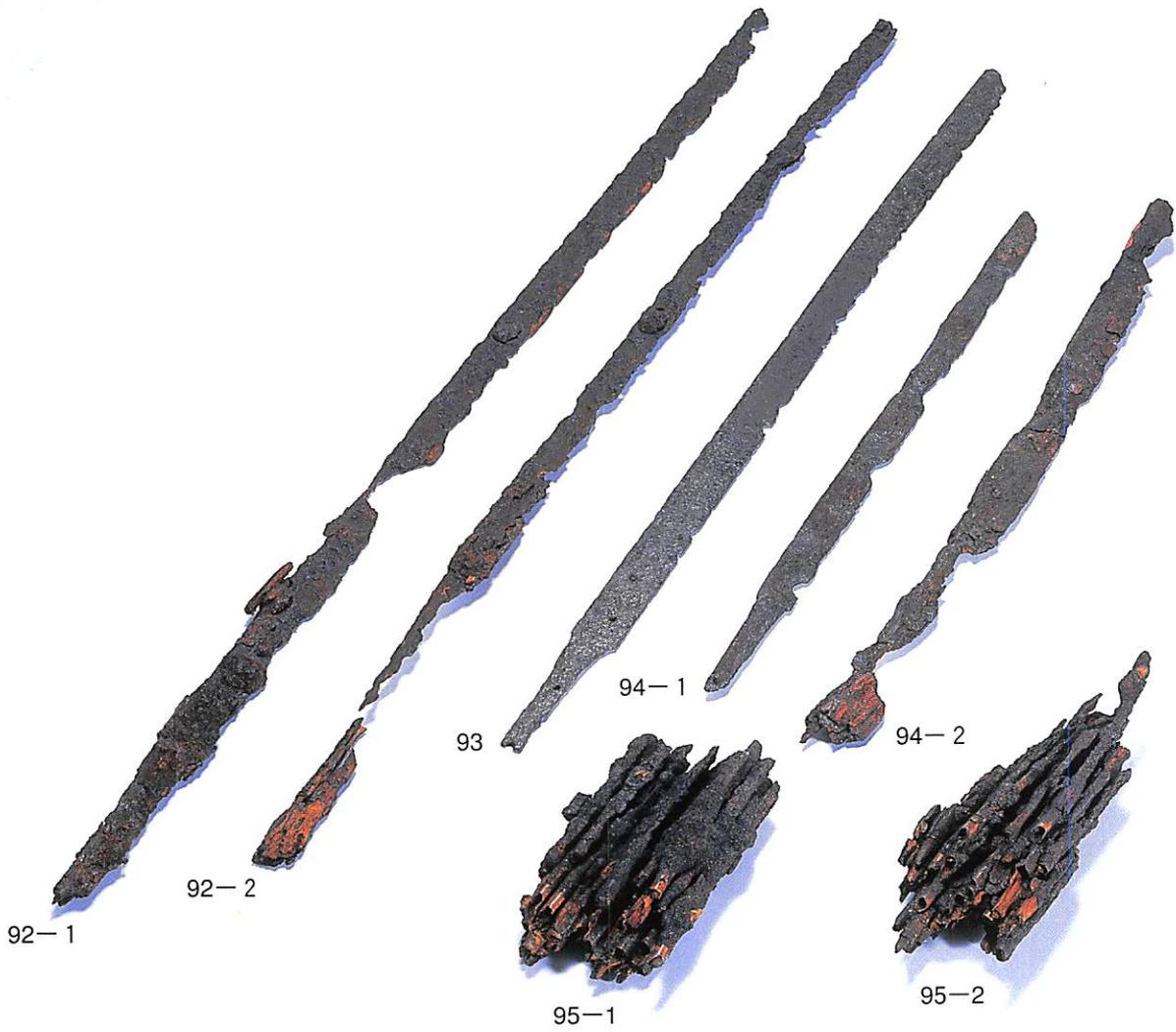
（『長目塚と阿蘇国造』より）



玉類：長目塚古墳



前方部の竪穴式石槨（『阿蘇長目塚』の図に一部加筆）



92-1・2. 直刀：長目塚古墳
93. 直刀：迎平古墳
94-1・2. 直刀：平井古墳
95-1・2. 鉄鎌：長目塚古墳

阿蘇の国造

阿蘇谷では、現在、86基の古墳が見つかっています。中通古墳群が、4世紀末から5世紀初めに造られた後、阿蘇谷の東部の手野地区てのに古墳群が造られています。

その一つ、迎平古墳群むかえびらは、5世紀後半の古墳群です。中でも迎平六号墳からは、画文帯神獸鏡が見つかりました。この鏡と同じ形のは、江田船山古墳（菊水町）と国越古墳（宇城市：旧不知火町）の他、県外で3面のみが知られています。他地域との関係を示すものとして貴重なものです。

国造神社西側に隣接してある上御倉古墳かみみくらと下御倉古墳しもみくらは、6世紀頃の円墳です。白と黄で装飾がほどこされた上御倉古墳の横穴式石室は、菊池川流域との関係を示すものです。

平井古墳群は、長目塚古墳の調査に際して確認された横穴式石室1基と横穴墓2基からなる古墳群です。残念ながら、現在はその所在が不明となっていますが、6世紀後半に推定される古墳群です。

この他、東手野古墳群、城山横穴墓群、塩塚古墳などがあり、この一帯が阿蘇国造やそれに関係する人々の本拠地であったことが想像されます。



96. 画文帯神獸鏡（表）：迎平六号墳



画文帯神獸鏡（裏）



97. 馬具：平井古墳



98. 馬具：塩塚古墳

弥生のムラ

阿蘇谷での弥生人のくらしは、約2100年前の弥生時代中期までさかのぼります。それは、かりおかたむた狩尾方無田遺跡で見つかった堅穴住居跡に代表されますが、このころの遺跡の数は、あまり多くありません。

阿蘇谷の弥生時代の遺跡が最も多くなるのは、かりお狩尾遺跡群、しもやまにし下山西遺跡、このぼる小野原A遺跡、しもおうきはら下扇原遺跡、じんない陣内遺跡などに代表される、約1900年前の弥生時代後期です。南郷谷でも、同時期の柏木谷遺跡や南鶴遺跡が見つかっています。なかでも狩尾遺跡群では、全体で131軒の堅穴式住居跡が見つかっています。

下山西遺跡からは、北九州方面で造られたと推定されているガラス製勾玉や仿製鏡（日本国内で造られた鏡）の「ほうせいきょう内行花文鏡」が、じゅうたいきょう狩尾湯の口遺跡からは、「じゅうたいきょう獸帯鏡」の破片、どうこう下扇原遺跡からは、「銅釘」が見つかっています。阿蘇の弥生ムラの地位を表す重要な資料です。



99. 内行花文鏡：下山西遺跡



100. ガラス製勾玉：下山西遺跡



101. 勾玉：下山西遺跡



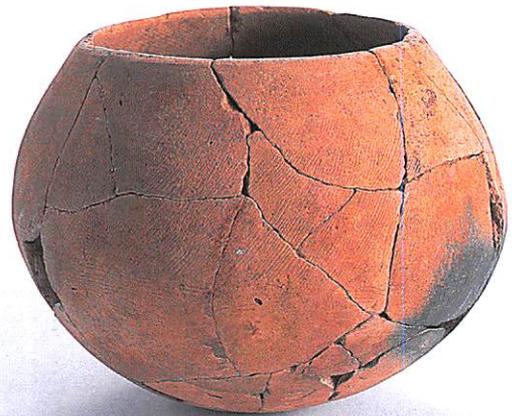
102. 破鏡：狩尾湯の口遺跡



103. 石包丁：下山西遺跡



104. 弥生土器：小野原A遺跡



105. 弥生土器：小野原A遺跡



106. 弥生土器：小野原A遺跡



107. 弥生土器：小野原A遺跡



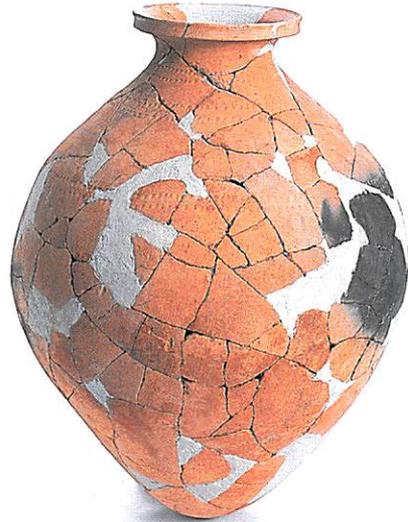
108. 弥生土器：小野原A遺跡



109. 弥生土器：小野原A遺跡



110. 弥生土器：小野原A遺跡



111. 弥生土器：小野原A遺跡



112. 弥生土器：小野原A遺跡



113. 弥生土器：小野原A遺跡



114. 弥生土器：小野原 A 遺跡



115. 弥生土器：小野原 A 遺跡



116. 弥生土器：小野原 A 遺跡



117. 弥生土器：小野原 A 遺跡

弥生のボタン

下扇原遺跡で見つかった「銅釦」は、破魔などの意味で衣服、盾、鞆などに着けて用いられていたものと考えられています。県内では、神水遺跡(熊本市)、小野崎遺跡(菊池市七城町)及び下扇原遺跡の3例で、全国でも11例しかなく、大変貴重なものです。もともと「銅」製であると考えられ、「銅釦」と呼ばれていますが、今回、下扇原遺跡で見つかった「銅釦」の成分分析をした結果、材質は錫86.5%、鉛9.2%、銅2.0%、その他というものでした。下扇原遺跡の「銅釦」は、錫を主成分とした「錫」釦だったのです。今後は他の「銅釦」の検討が待たれます。

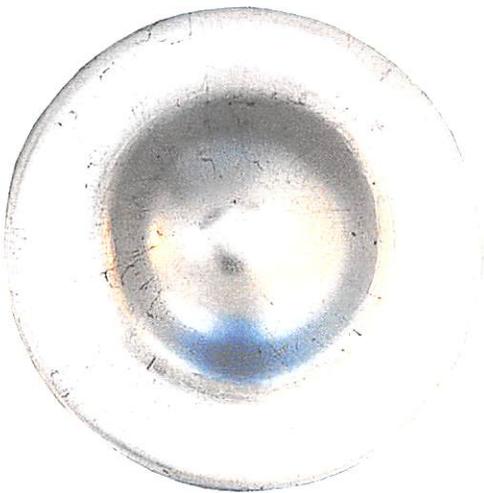
錫と鉛の合金で作られた「銅釦」の当時の色は、銀色に近いものです。銀の代用品として使われていた可能性も指摘されています。



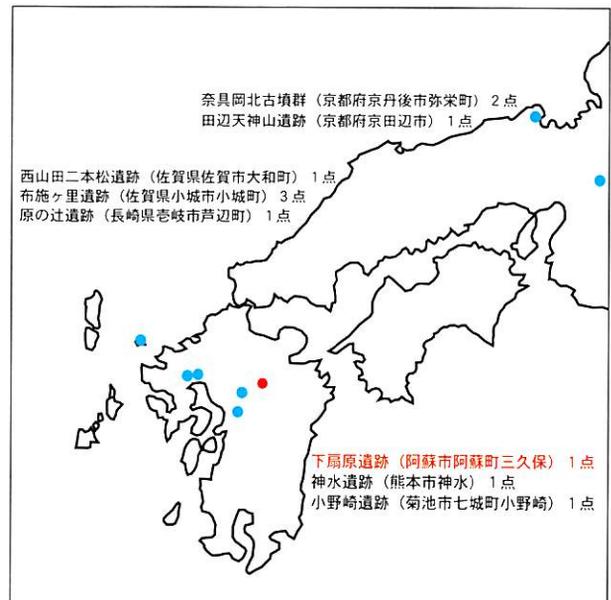
118. 銅釦：下扇原遺跡



裏



銅釦復元模型(参考資料)



「銅釦」の出土地

コーナー3 赤き土、硬き鉄 ●.....

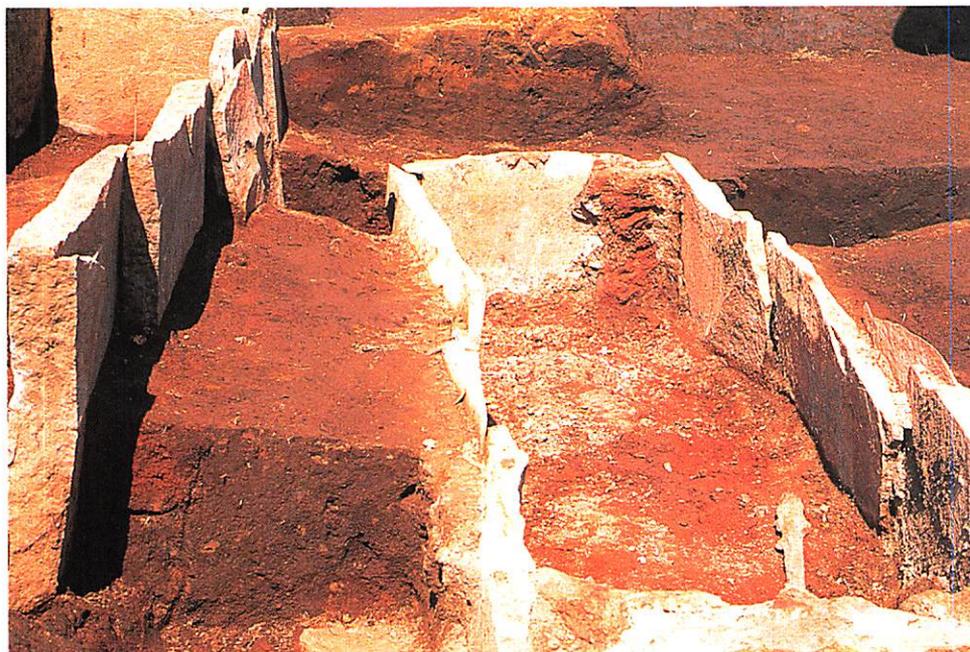
阿蘇の弥生ムラで見つかる品々の中で、他地域を圧倒するものが二つあります。一つがベンガラで、もう一つが鉄製品です。

古代、「赤色」は特別な色であり、呪術的なものであったと言われています。赤は、石棺（にぬり）の内部、丹塗土器などの祭祀的な道具を彩っていました。

また、弥生時代に大陸からもたらされた金属器の一つである鉄は、それまでの道具の素材として使われていた石に代わって、日本各地に普及していきました。

弥生人の祭祀などに必要とされたベンガラ、生活を便利にするための鉄製品。

阿蘇の弥生ムラは、これらの品々を多く持っていたことが分かっています。これらは、何を示しているのでしょうか。



下山西3号石棺
(熊本県教育委員会提供)

ありあまる赤き土

下山西遺跡からは、4つの石棺が見つかりました。特に2号・3号・4号石棺の内面には、ベンガラが厚く塗られていました。そのベンガラの量の多さには圧倒されます。

2号石棺が40kg、3号石棺が30kg、4号石棺が35.5kgで、合計で100kgを越えるものでした。「塗る」というより「敷き詰めた」と表現されるように多量に使われていました。こうした「ぜいたく」なベンガラの使用例は、狩尾遺跡群や小野原A遺跡などの弥生の住居跡でも見つっていますが、他の地域ではあまり例がありません。ベンガラを大量に使える阿蘇の弥生ムラの特異性を見ることができます。

求められる赤き土

阿蘇の弥生ムラからは、鏡などの青銅製品やガラス製勾玉など、他地域との交流の中でこの地に持ち込まれたものが見つかります。このような貴重品を手に入れるための代価として何が使われたのか。その答えの一つとして、島津義昭氏（熊本県立美術館副館長）は、次のように考えています。

「阿蘇に産出し、他地域にないものを探してみるとベンガラがある。ベンガラはその赤色が弥生時代にあっては大変貴重であったと推測される。阿蘇黄土は、酸化させれば赤色になる。酸化の方法は焼けば、比較的簡単にできるので大量に生産されたと考えられる。阿蘇谷でつくられたベンガラがどの地方で使われたか、現在ははっきりした資料はないが、将来それがわかれば、弥生時代の阿蘇地方と他地域の交易の実際がよくわかってくるだろう。」（『阿蘇町史』より）



119. 丹塗土器：地藏原遺跡



120. 丹塗土器：地藏原遺跡



121. 丹塗土器：地藏原遺跡



122. 丹塗土器：地藏原遺跡



123. 丹塗土器：地蔵原遺跡



124. 丹塗土器：地蔵原遺跡



125. 丹塗土器：地蔵原遺跡



126. 丹塗土器：地蔵原遺跡



127. 丹塗土器：地蔵原遺跡



128. 丹塗土器：地蔵原遺跡

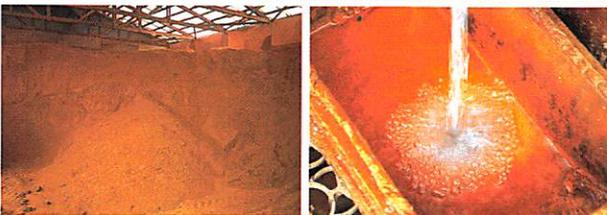
ベンガラ

ベンガラ「弁柄」は、インドのベンガル地方で産出した酸化鉄に由来すると言われている「赤色」の顔料です。その原料は、製鉄に使われる天然の鉱物「赤鉄鉱^{せきてつこう} Fe_2O_3 (ヘマタイト)」で、主成分は第二酸化鉄です。古代、赤色のベンガラは、石棺の内部や土器に塗られたりして使われていました。

実は、阿蘇市阿蘇町狩尾一帯にも、鉄分を多く含む堆積物があります。「褐鉄鉱^{かってつこう} FeOOH (リモナイト)」と呼ばれる鉱物で、水酸化第二鉄です。阿蘇では、「阿蘇黄土^{あそうど}」とも呼ばれ、まさしく黄色い土です。この黄土を焼くと「赤色」になります。黄土の中に含まれる鉄分が酸化し、赤色になります。

古代から現代へ

現在もこの地域（鉱山名：第一阿蘇鉱山）では、褐鉄鉱（リモナイト）が採掘されています。褐鉄鉱は、主成分の鉄分その他、カルシウムやマグネシウムなど、天然のミネラル成分をバランスよく含んでいるため、様々な利用価値が見いだされています。採掘をしている株式会社日本リモナイトは、褐鉄鉱の性質を利用して、脱硫剤や家畜飼料、農業用の土地改良剤を開発し、さらには、水質浄化用としても阿蘇谷を流れる黒川などの環境保全にも役立てています。褐鉄鉱は、古代から活用され続けている阿蘇の恵みの一つと言えます。



阿蘇黄土

鉄分を含んだ水



褐鉄鉱

清めの赤き土

狩尾遺跡群や下扇原遺跡では、住居を廃棄^{はいき}するとき、大量のベンガラを撒^まいたり、あたかも「盛り塩」のようにブロック状に置いたりする風習が阿蘇の弥生時代にあったことが分かっています。ベンガラは、埋葬などの祭祀儀礼の他、住居を廃棄する時に行う祭祀儀礼でも使われていたのでしょう。

もしかすると、これもベンガラが豊富にある阿蘇のムラならではの行為なのかもしれません。

豊富な硬き鉄

阿蘇の弥生ムラが他地域の弥生ムラと決定的に違うのが、鉄製品が多いということです。例えば、下山西遺跡からは163点、狩尾遺跡群からは318点の鉄製品が見つかっています。また、最近、調査された小野原A遺跡では1200点以上も見つかっています。

鉄は、弥生時代に大陸から伝わってきました。鉄などの武器、手鎌や鎌などの農具、刀子や鉈などの工具の材料として、大いに人々の暮らしに役立ちました。ただしその量は、日本各地を見てもそんなに多いものではありません。そんな中、阿蘇の鉄の多さは、目を見はるものがあります。



129. 鉄鏃：下山西遺跡



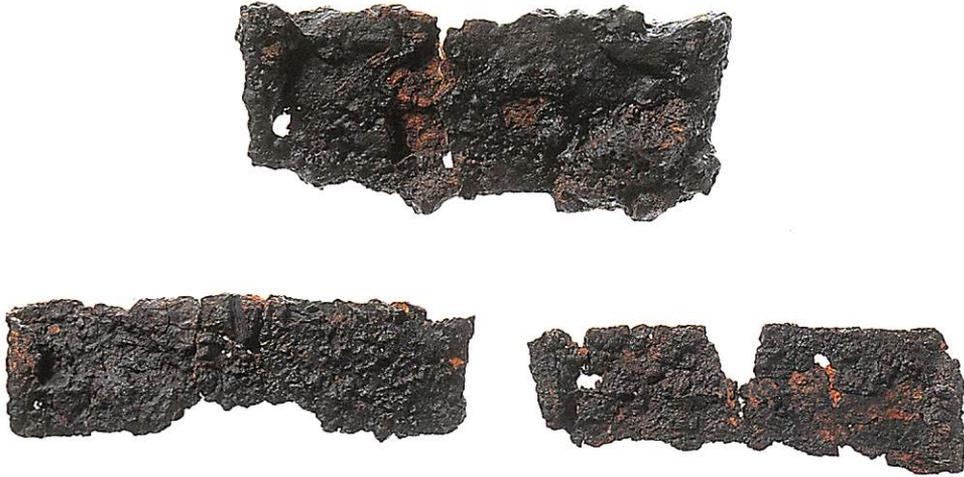
130. 鉄鏃：狩尾湯の口遺跡



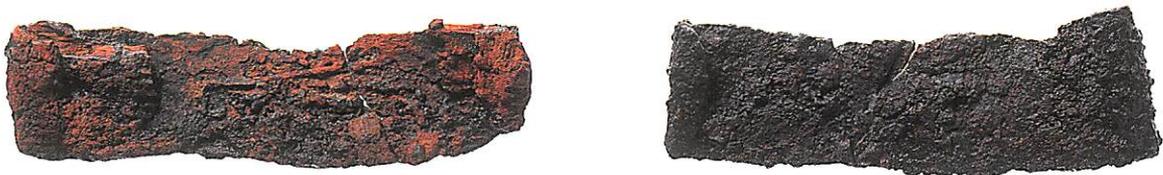
131. 鉄鏃：狩尾池田・古園遺跡

褐鉄鉱

阿蘇谷が火口湖であった頃。湖には、地中からのマグマ、熱水に含まれるミネラル成分、さらには植物などの有機物が蓄積され、水中で分離分解されました。溶け出した鉄分を多く含む堆積物は、湖底に残され、現在の「褐鉄鉱（リモナイト）」が生まれました。「赤鉄鉱」には及びませんが、鉄分含有率は、約70%もあり、戦時中には、鉄鉱石の代わりに北九州の八幡製鉄所に送られていました。現在も採掘されているのは、国内では阿蘇だけです。まさしく阿蘇の地には、鉄の原料となる褐鉄鉱が存在していたのです。



132. 鉄製手鎌：下山西遺跡



133. 鉄製手鎌：狩尾池田・古園遺跡



134. 鉄製手鎌：狩尾湯の口遺跡

135-1. 鉄鎌：下山西遺跡

鉄製手鎌と鉄鎌

弥生時代後期には、収穫の道具として、鉄製手鎌てがまと鉄鎌てがまが使われていました。

鉄製手鎌は、鉄の板の両端を内側に曲げて木板をはめ込み、石包丁と同じように、穂いしはうちょうを摘みとる道具として使われていました。

鉄鎌は、現在の鎌と同じ使い方で、稲や草の根刈りの道具として使われていました。



135-2. 鉄鎌：下山西遺跡



136. 鉄製鋤先又は鋤先：下山西遺跡



137. 鋤：狩尾湯の口遺跡

138. 鋤：狩尾池田・古園遺跡

鈍と刀子

木材などを加工するための鉄の道具として、鈍と刀子があります。

鈍は、木材の表面を仕上げるための道具で、彫刻刀のような形をしている鉄製品で、木の柄に付けて使われていました。池田・古園遺跡の鈍には、木片がのこっています。

刀子も木材の加工に使われていたナイフ（小刀）です。やはり、木や鹿骨の柄につけて使われていました。



139. 鈍：下山西遺跡

求められる硬き鉄

阿蘇地方の弥生ムラに見られる豊富な鉄製品と阿蘇地域で産出される褐鉄鉱。このことは、何を意味しているのでしょうか？

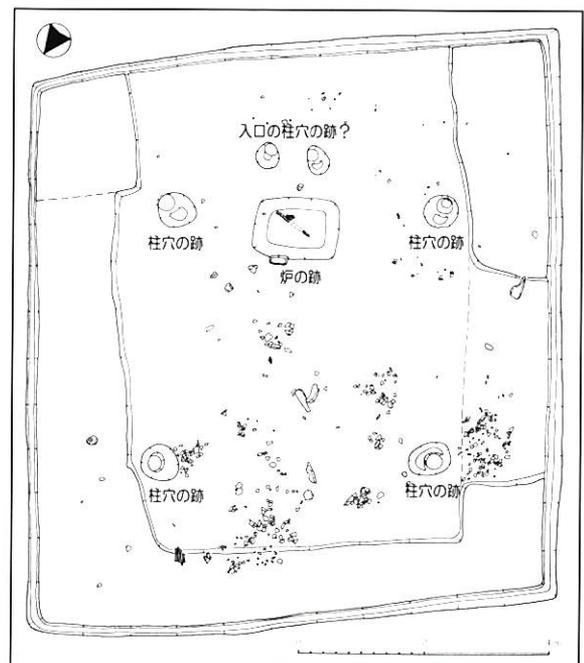
阿蘇谷に弥生ムラが作られた頃、稲作に適している他の地域でも、多くのムラが作られています。当然、その地域でも鉄の需要は多かったと思われます。この時代に鍛冶の跡は、見つかっていませんが、もしかしたら、この地で産出される「褐鉄鉱」と大量の「鉄製品」は、他地域へもたらされていた可能性もあるのかもしれませんが。

弥生の鍛冶屋？

狩尾湯の口遺跡で見つかった9.42m×8.44mの大型のたてあなじゆうきょ 縦穴住居跡。4本の柱、焼土と炭化物が多く見つけたろ 炉の埋土、しかもその床面は、熱によって赤く硬くなっていました。この住居からは、多くの鉄製品もみつき、鍛冶工房の性格をもった建物であったのではと考えられています。



狩尾湯の口遺跡 2号住居



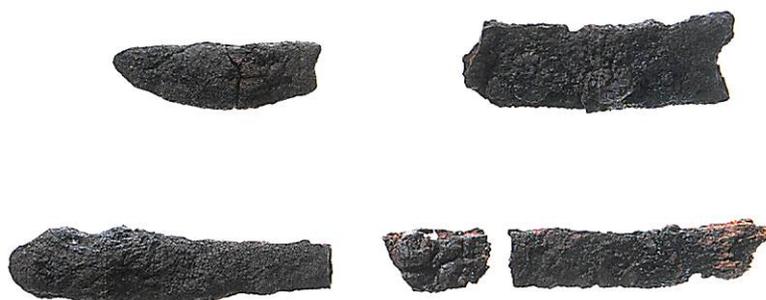
(『狩尾遺跡群』の図に一部加筆)



140. 刀子：狩尾湯の口遺跡



141. 刀子：狩尾池田・古園遺跡



142. 刀子：下山西遺跡



143. 鉄斧：狩尾湯の口遺跡



144. 鉄斧：狩尾池田・古園遺跡



145. 鉄斧：下山西遺跡

ゾーンⅢ

阿蘇の魅力
〜阿蘇に
生きる〜



コーナー1 草原と危機



草原と放牧

青々と広がる草原のじゅうたん、のんびりと草を食む牛や馬たち。

こうした壮大な風景を楽しむために、毎年大勢の観光客が阿蘇を訪れています。ある人たちは牛と一緒に写真を撮り、ある人たちは野草たちの可憐さに心奪われます。誰もが阿蘇の大自然に感激し、その素晴らしさに癒されることでしょう。

しかし一見何もない大自然にも見える阿蘇ですが、実はそこに人間も含めた多くの生命が生きています。阿蘇の大自然そのものも実は元よりあったものではなく、こうした多くの生き物たちとの長い関わりの中で共に形づくられてきたものなのです。

ここでは、こうした阿蘇の草原の魅力と、それを維持することの難しさについてみていきましょう。

貴重な動植物の宝庫

太陽の光を樹木たちがさえぎってしまう森林とは違い、明るい陽射しが地表にまで降り注ぐことのできる草原には、草原特有の野草たちがたくさん生きています。ここは彼らにとって楽園です。阿蘇の植物は約1,600種もあり、これは熊本県の分布種のおよそ70%も占めています。



ヒゴタイ

(熊本県環境生活部自然保護課提供)

阿蘇は大変貴重な植物の宝庫です。阿蘇の植物には、日本の北方からやって来た仲間、九州が四国や紀伊半島と陸続きだった頃にやって来た仲間、九州が中国大陸と陸続きだった頃にやって来た仲間たちが大勢集まっています。彼らにとっても阿蘇は、森林化が進んだ日本で、まだ生きることのできる大変貴重な場所です。



オオルリシジミとクララ
(熊本県環境生活部自然保護課提供)



糞虫

そうした豊富な植物たちをあるときは餌にし、あるときはすみかにしている動物たちもたくさんいます。例えばオオルリシジミという小さくて美しい蝶がいます（国の絶滅危惧Ⅰ類に指定されています）。彼らはクララという草原に生きるマメ科の植物を餌にして育ちます。実はこのクララ、名前は可愛らしいのですが、もし食べると頭がクラクラするほど苦い植物で（このためクララと名が付いたともいいます）、そのことを阿蘇の牛たちはちゃんと知っていて決して食べません。牛が食べないのでクララは生き残ることができ、クララが生き残るのでオオルリシジミも生き残ることができるのです。ですからオオルリシジミという貴重な蝶を守るためには、オオルリシジミだけではなく、クララも、クララが生きられる草原も、その草原を守る牛やその牛を飼う阿蘇の人びとも、すべて欠かせないことがわかります。阿蘇の自然は、人間も含めた多くの生物たちと共存して成り立っているのです。



ヤツシロソウ
(熊本県環境生活部自然保護課提供)

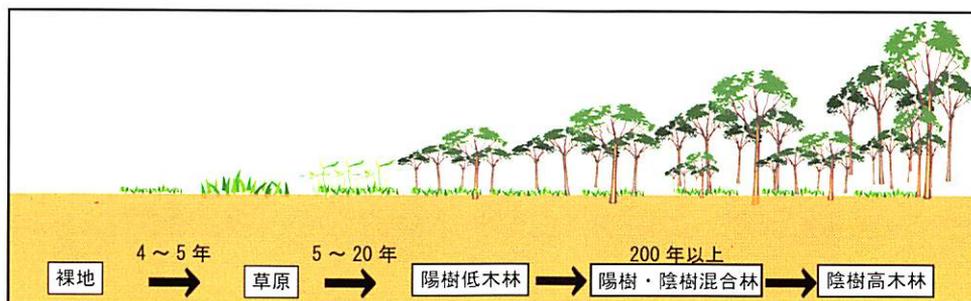


ハナシノブ
(熊本県環境生活部自然保護課提供)

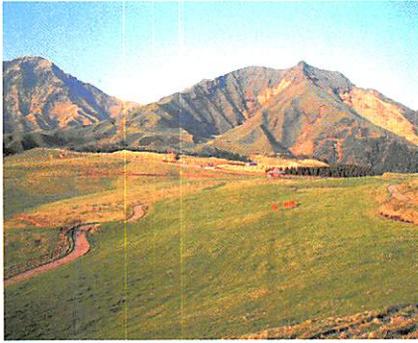
草原を維持してきた阿蘇の人びとの暮らし

年間3,000mmを越すほどの豊富な雨量を持つ阿蘇では、植物の世界も草原のままで止まることはありません。ふつう植物たちは何もない裸の土地から、少しずつ背の低い草が生えてきて、やがて草原となり、そして森林へ動いていきます（それがまた大雨で山が崩れたり山火事にあって木が倒れたりするとまた裸地に戻り延々と繰り返されます）。

では、阿蘇で植物たちが森へ動かず草原で止まっているのは何故でしょう？



遷移

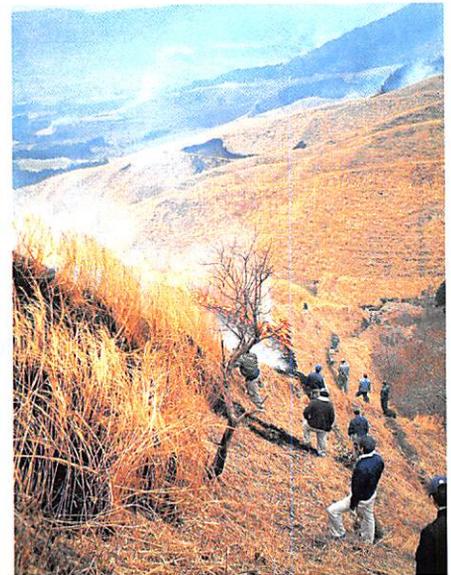


阿蘇の草原



北向山の原生林

実はそこに、長年にわたる人間たちとの関わりがあります。阿蘇の人びとは、火山灰の土壌と寒冷で厳しい阿蘇に生きるため、ずっと牛馬と一緒に暮らしてきました。春から夏にかけて山一面に広がる草原に牛馬たちを放し、秋には冬の間の餌になる草を刈り、そして冬は牛馬を里の家に帰して家族と一緒に生活しました。牛馬は農業機械のなかった時代には一番の労働力でしたし、また山の草は牛馬の餌になるだけでなく、化学肥料のなかった時代には田畑に鋤き込む大切な肥料でした。こうした牛や草と共に生きる環境を維持するため、阿蘇の人びとは毎年春になると山に火を入れてきました。これを「野焼き」といいます。野焼きをすると山が森林化するのを防ぎ、牛たちが好きなイネ科の植物が育つのを助け、また牛馬につくダニなども退治することができます。



野焼き



草泊まり

昭和30年頃までの干草刈りは草原に作った小屋に宿泊して行われていた。

代には田畑に鋤き込む大切な肥料でした。こうした牛や草と共に生きる環境を維持するため、阿蘇の人びとは毎年春になると山に火を入れてきました。これを「野焼き」といいます。野焼きをすると山が森林化するのを防ぎ、牛たちが好きなイネ科の植物が育つのを助け、また牛馬につくダニなども退治することができます。

こうした人間たちの放牧・採草・野焼きという年間を通じた関わりによって阿蘇の草原は維持することができ、またそこにたくさんの貴重な動植物も維持することができたのです。もちろん適正に山を管理することで、人びとに恐れられた山汐(山津波)や山火事も防止し、地下水の涵養にも寄与したことはいうまでもありません。



放牧



採草



野焼き

危機に瀕する草原

そうした貴重な草原も、いま大変な危機にさらされています。草原の面積が毎年どんどん減っているのです。

それは草原がどんどん放棄されているからですが、理由は様々あります。まず牛馬を飼う農家がどんどん減っているということです。阿蘇の牛は現在、主に肉牛として飼育されていますが、海外からの安い牛肉の輸入や、最近ではBSEの問題な

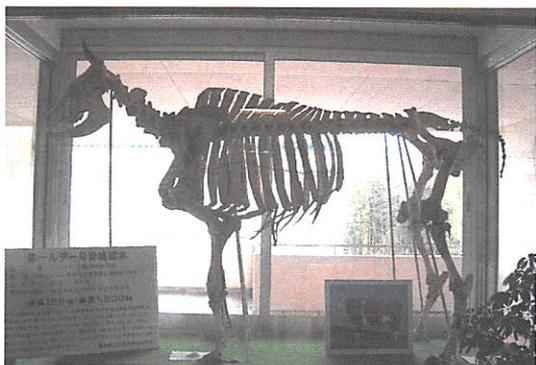


広大で斜面の原野での採草

どで畜産業界をめぐる環境が大変厳しくなっています。牛を飼う仕事は、苦勞ばかりが多くて生活が苦しいと、若い人たちが後を継がなくなっています。こうして畜産農業に従事する人たちがどんどん高齢化していることも原因の一つです。

阿蘇の草原を守るための作業、つまり野焼きや採草といった作業は、重い草刈機や束ねた草を担いで急な斜面を登り降りせねばならず、機械化することができないので今でもすべて手作業で、大変な重労働です。最悪の場合は火に巻き込まれて命を落とすことさえあります。そうした作業をほとんどご高齢の方々ばかりで現在維持しているのです。これから先、どれだけ阿蘇の草原を維持することができるのか、大変不安な状況です。

私たちはこれまで、こうした阿蘇の人びとの苦勞に心を寄せることなく、ただ純粋に阿蘇の素晴らしい景観を楽しんできました。しかし、このままでは阿蘇の貴重な景観も、貴重な動植物たちも、やがては消えてしまう恐れがあります。私たちに何ができるのか、一緒に考えてみましょう。



ルデー号骨格標本



熊本のあか牛

ルデー号

品 種：シンメンタール種（乳肉兼用種）

原 産 地：スイス

生 年 月 日：明治42年9月

繁殖供用期間：明治44年5月～大正9年6月

・体高168cm ・体重1,500kg

あか牛の改良に活躍した外国種（シンメンタール種）の「ルデー号」は、明治44年に国営の種牛所から貸し下げられました。貸し下げられた阿蘇農学校（現県立阿蘇清峰高校）では、在来種との間に、体格のすぐれた種雄牛を次々と産出しました。現在供用されている種雄牛も、血統をたどっていくと、そのほとんどがルデー号に至ると言われます。ルデー号はまさしく、熊本にあか牛のルーツといえる牛です。現在、熊本県立阿蘇清峰高校にその骨格標本が保存・展示されています。

コーナー2 火を制する



1990年（12月6日）のストロンボリ式噴火
（阿蘇火山博物館提供）

阿蘇山は古くから信仰の対象とされてきた山ですが、それはもちろん阿蘇山が火を噴く特別な山だからです。

火を噴く山を畏怖し、その神聖な力を授かろうと、阿蘇山に修行に登る人たちが昔から数多くいました。もちろんそうした修行者でなくても、壮絶な光景を一目見ようと大勢の人びとも訪れ、戸下や内牧の温泉とあいまって阿蘇は一大観光地となりました。また阿蘇の里々では、火に関する神仏の石碑やお祭りもたくさん見ることができます。

ここでは、そうした長い年月にわたる阿蘇の人びとと火との関わりについてみていきましょう。

お池さん参り

もうもうと噴煙をあげる阿蘇中岳。その火口をのぞき込むと、中には青緑色の水が湛えられています。その水位は常に上下して、まるで何かを予兆しているかのようにも見えるので、人びとはこれを「お池さん」と呼び、水位の変化を神の意思の現れとして崇めてきました。池の水が著しく低くなると、やがて地鳴りがして、恐ろしい量の火山灰を噴き出し、空も家も田畑もすべて真っ黒になってしまうため、人びとは大変恐れしました。

そのため、阿蘇山に登山することそのものも「お池さん参り」と呼ばれていました。阿蘇山に登ることは現在のような単なる観光見物ではなく、「御池」という聖地に参拝する宗教的な行為だったのです。現在古坊中と呼ばれる火口の西側一帯には、かつて数多くの修行僧たちが実際に住み込んでいました。彼らを修験者といい、



昭和初期の登山の様子

その一帯を西巖殿寺さいがんてんじと呼んでいました。御池の西の巖につくられた大きな仏殿という意味です。阿蘇山の化身は十一面観音とされた（さらにそれは阿蘇の神である健甞龍命の化身ともされた）ので、阿蘇には十一面観音像がたくさん祀られています。こうして阿蘇山上の火口周辺には、厳しい環境の中で修行する大勢の修験者たちが暮らし、彼らはまた「お池さん参り」に来る大勢の一般参拝客たちのガイドのようなこともしていたようです。

残念ながら様々な理由が重なって、その後古坊中には誰も住まなくなりましたが、加藤清正公ふもとほうちゆうにより現在の阿蘇駅前周辺に再び西巖殿寺を中心とした坊が再建され、現在も麓坊中（あるいは単に坊中）と呼ばれて重要な宗都となっています。

火の神様、火の仏様

阿蘇谷や南郷谷を歩いているとよく目にするのは「猿田彦太神」の石碑ですが、そのほかにも特に阿蘇谷を歩いていると「秋葉山大権現あきはさんだいこんげん」の石碑を見かけますし、また「火之迦具土神ひのかぐつちのかみ」の石碑を目にすることもあります。この両者はともに火伏せの神様で、秋葉山は静岡県浜松市春野町にある秋葉神社を本宮とする信仰、火之迦具土神はその祭神です。火之迦具土神は『古事



西巖殿寺の火渡り

記』に語られる日本神話で、生まれてきたときに母（伊邪那美命いざなぎのみこと）を焼き殺してしまったことでも知られる神ですが、こうした火に関する神々が阿蘇谷で多く祀られているのは興味深いことです。秋葉山も阿蘇山と同じく、中世の頃に修験者たちによって大きな神仏習合の修行場とされた霊場ですので、阿蘇でもそうした修験者たちが秋葉山の信仰を阿蘇の里々に伝え歩いたのではないかと想像されます。

一方南郷谷では、火に関しては神様よりも仏様のほうが顕著で、たとえば旧阿蘇郡白水村（現南阿蘇村）吉田新町地区の「鎮火祭」は毎年夏に火伏地蔵を祀りニワカなどを奉納するものですし、旧阿蘇郡蘇陽町（現上益城郡山都町）馬見原地区の「火伏地蔵祭り」も同じく火伏地蔵を神輿に乗せて街を練り歩き、最後は五ヶ瀬川につけて無病息災を祈る祭りです。どちらもかつては宿場町として栄えた地区の祭りであり、火災に悩まされた商都ならでの祭りですから、農村地帯に祀られた阿蘇谷の秋葉山とは性格を異にしているとは思われますが、いずれも阿蘇の火に関する民俗文化として興味深いものです。

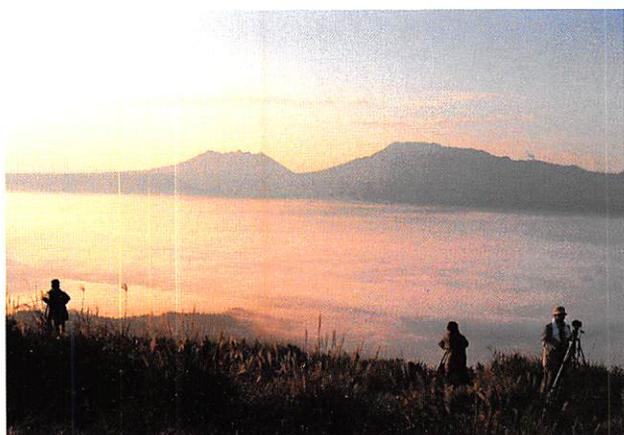


火之迦具土命



秋葉山大権現

コーナー3 「自然の脅威と恩恵」 ●.....



雲海（吉澤寿康氏撮影）

多くの観光客たちに癒しの時間と空間を与える阿蘇ですが、実際に阿蘇に暮らす人びとにとっては、生きるにはなかなか厳しい土地でもあります。

あつという間に村々を埋め尽くす火山灰をはじめ、寒冷な気候、大雨、大雪、山汐（山崩れ）、大霜、大風……様々な自然の厳しさが麓の集落を襲い、そのたびに人びとは力を合わせて脅威に立ち向かってきました。しかし同時に湧水や温泉、豊かな食文化など、自然の厳しさは様々な恩恵ももたらしました。

ここではそうした阿蘇の自然の厳しさと、それに対応する形での里の人びとの豊かな文化についてみていきましょう。



1990年の噴火
（阿蘇火山博物館提供）

山汐^{しお}と地下水

多量の降水量を持つ阿蘇では、たびたび山崩れや土砂災害の被害が集落を襲います。熊本市内でも有名な昭和28年の水害はもちろん阿蘇にも未曾有の被害をもたらし、多くの家屋や牛馬、人間たちが流されて尊い命が奪われました。集落が丸ごと流れてしまったところもあります（阿蘇の各地にはそのときの慰霊碑が建てられています）。また、最近では1990（平成2）年にも大水害が起き、内牧地区や坂梨地区などに大変な被害が出ました。



1990年の坂梨水害

阿蘇の山々は、中岳から降り積もったヨナ（火山灰）で覆われています。ヨナは大変軽く侵食されやすく、多量の雨が降ればすぐに流れて麓の集落を襲います。阿蘇の地元ではこうした山津波を「山汐」と呼んで、阿蘇の山中には砂防ダムがいくつも建設されています。阿蘇の山汐は火山の活動と大いに関係があります。1990（平成2）年に大被害をもたらした山汐は、その前年に大噴火して積もった火山灰が翌年地元を襲ったものです。噴火による



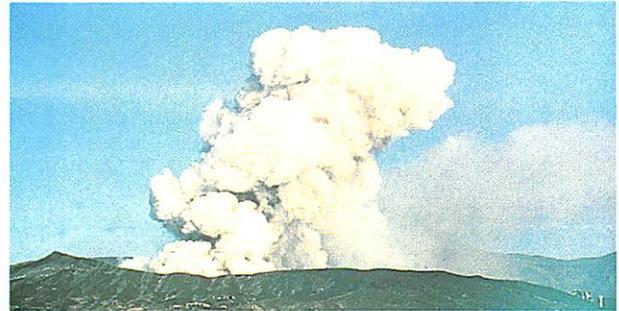
その年の被害はもちろん、翌年にも決まっ
て山汐により集落の家々は壊され、牛馬を
放牧する山道は崩され、川に架けられた橋
は流されていきました。そこで人びとは川
に頑丈な石橋を架け、山の上まで道に石畳
を敷きつめたのです。どちらも大変な土木
工事だったと思います。しかしそれらの工
事に使われた石は「阿蘇溶結凝灰岩」とい
って、同じく阿蘇の火山灰が降り積もり固
まってできたもので、阿蘇の恩恵でもあり
ました（熊本県下に広く優れた石工文化が
みられるのは、この加工しやすい阿蘇の溶
結凝灰岩のおかげだともいえます）。



滝室坂

多量の雨水は、多くの河川を潤す恵みの
雨でもあります。白川、緑川、菊池川、杖
立川から筑後川、大分県の大野川、宮崎県
の五ヶ瀬川などの一級河川は、すべて阿蘇を源流とし
ています。また地中にしみ込んだ多量の雨水は豊富な
地下水となり、水前寺公園や八景水谷など美しい景観
をもたらし、また熊本市内はダムを持たずにほぼ
100%地下水で賄うことのできる全国でも珍しい都市
であることもよく知られています。もちろん阿蘇にも
多くの湧水地があり、白川水源（南阿蘇村）や池山水
源（産山村）をはじめ多くの湧水地では連日水を汲みに訪れる人びとで賑わっています。

地下に浸透した水は冷たい湧水として以外にも、温かい水として、つまり温泉の恵みとも
なって私たちを癒してくれます。阿蘇に多くの温泉があるのはもちろん阿蘇が火山であるか
らであり、またその露天風呂から楽しめる美しい山の眺めもまた火山がもたらした恩恵の一
つと言えます（一般に火山はマグマが綺麗に流れて美しい山の線を作り、多くが景勝地にな
っています）。私たちは人間が生きる上で最も必要な水について、その多くを阿蘇に頼って
いるということができます。



1990年の噴火（阿蘇火山博物館提供）



阿蘇の火山灰（阿蘇中岳、昭和30年代及び平成元年頃のもの）
黒（左）：阿蘇中岳本来のマグマが噴出したもの。
赤（中）：本来のマグマが噴出する際に、鉄分が空気に触れ酸化
したもの。
白（右）：本来のマグマではなく、もともと火口底周辺にあった
変質した岩石を壊して飛ばしたもの。



阿蘇の火山弾（阿蘇中岳、年代不詳）

マグマが空中に飛ばされた際に冷え固まったもので、球形や楕円
形をしている。



池山水源（産山村）

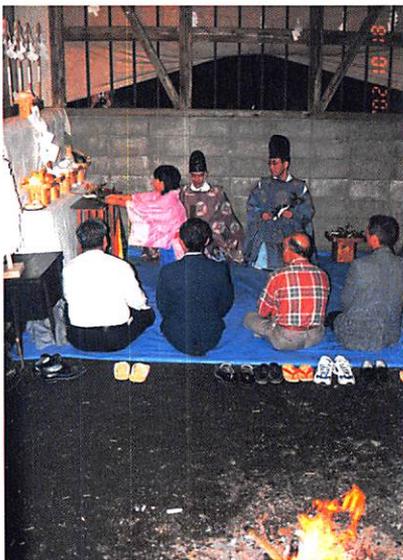
大霜と鬼八

カルデラという言葉はスペイン語で大きな鍋という意味です。外輪山に囲まれた阿蘇は巨大な鍋の形をしていて、中央の火口丘を挟んで北側を阿蘇谷、南側を南郷谷と地元では呼んでいます。つまり阿蘇は一つの巨大な谷であります。

そこで阿蘇では様々な自然現象が起こってきます。寒くなってくると、夜間の放射冷却により、上空よりも地表近くのほうが気温が低いという逆転現象が起きます。そうして冷やされた空気が飽和状態となり、霧となって漂うといわゆる「雲海」が発生します。最近観光客のあいだで人気のこの雲海も、阿蘇に生きる人にとっては厳しい冬の訪れを告げる象徴でもあります。

また、阿蘇には厳しい霜も降ってきます（ただし霜は雲海と同じく、放射冷却のきついに空気中の水蒸気が直接氷の粒となって農作物などに付く現象なので、正確には「降ってくる」ものではない）。例えば茶畑などによく扇風機が立っているのを見ることがあるかもしれません。あれは空気をかき回して霜を防ぐものですが、阿蘇の場合は扇風機ではなくもっと驚く仕掛けがあります。それは、女の子がお宮に籠もって火を焚き続け、阿蘇に霜が降りないように祈るものです。阿蘇市役犬原地区にある霜宮神社の「火焚き神事」ですが、火焚き乙女はあの小さなお宮に59日間も籠もって阿蘇の人びとのために祈りました。

火焚き神事には阿蘇の神話が大きく関係しています。阿蘇の大明神・健磐龍命が家来の鬼八法師を従えて弓矢の鍛錬に出かけたときのことで、命は往生岳に腰掛けて、そこからの石（阿蘇市的石地区）めがけて矢を次々に射ました。その都度鬼八は矢を拾いに行っては命に届けていたのですが、ついに百本目に腹を立てたのか矢を足で蹴り返してしまいました。その無礼が命の逆鱗に触れ、鬼八は捕えられ首をはねられてします。鬼八の首は天に昇りながら「おのれ、これから阿蘇には大いに霜を降らせて困らせてやる」と言ったそうです。すると本当に阿蘇に霜が激しく降ってきて人びとは困ったので、霜宮を建てて鬼八の霊を祀ったということです。火焚き神事はこうした神話に基づき、現在も続けられている大変貴重な民俗文化です。いかにもスケールの大きい阿蘇らしい祭りだと思いませんか。



火焚き神事（霜宮）



霜宮の護符



大風と風祭り

阿蘇は風の通り道と言われるようにとても強い風が吹きます。台風はもちろん、そうでなくても谷内には時に強い風が吹き、出口である立野の火口瀬からは「立野のまつぼり風」と呼ばれる冷たい強風が吹き出て人びとに恐れられています（「まつぼり」とは例えば米俵から家族の者がちょっと米をくすねて小遣い銭を作るようなときに使われる阿蘇弁で、この風が吹くと収量がひよいと持って行かれてしまうのでそう言われるようになったともいいます）。こうした強い風が吹くと、農作物が次々と枯れたり倒れたり、家屋が吹き飛んだりして大きな被害が出ます。最近では2004（平成16）年の台風がひどく、阿蘇の農産物はほぼ壊滅状態でした。



阿蘇神社の風鎮祭

こうした風の被害に対しても、人びとは神仏に祈るしかありませんでした（逆にいえば、そうした厳しい自然環境が神仏を成立させたとも言えます）。阿蘇谷では阿蘇神社の神官が毎年春秋にこうした悪い風を封じ込める神事を行なっています。「風祭り」といい、神官が手に御幣を持ち、阿蘇神社（阿蘇市宮地地区）からおよそ4km北にある外輪山裾の風宮（阿蘇市手野地区）まで歩いて「風の神」をお宮に押し込めます。これもまた阿蘇らしいスケールの大きな神事といえます。一方南郷谷では高森町の「風鎮祭」が有名です。文字通り風を鎮めるためのお祭りとして、毎年二百十日の少し前、八月のお盆頃に高森町高森地区の商店街で賑やかに行なわれています。

ヨナと里芋

阿蘇に暮らしていてもっとも厳しい自然の脅威は、やはり火山の噴火でしょう。溶岩流が麓にまで流れてきて打撃を受けるということはありませんが、いちばんの被害は火山灰によるものです。阿蘇ではこの火山灰を「ヨナ」と呼んでいますが、火山灰に名前があるのはおそらく全国でも阿蘇だけではないでしょうか。それだけ火山灰は阿蘇の暮らしに大きな影響を与えているともいえます。



ツルノコイモ

もしヨナが降ると、まず農産物に被害が出ます。ほとんどの収穫は諦めなければなりません。またビニールハウスも重みで倒れて被害が出ます。稲作や畑作だけでなく、畜産にも被害が出ます。ヨナのかかった草を牛が食べるからです。いくら洗っても牧草についたヨナはすべて取れず、その草を食べた牛は歯がボロボロになります。牛の価値は歯を見て決めますので、当然価格も下落します。ヨナのために阿蘇を流れる白川や黒川に生きる魚の種類も少なく、河川の生物多様性は一般に低いといえます。土壌も大量のヨナが降り積もって大変な打撃を与えます。ヨナには何の栄養分もありません。再び栄養のある土に戻すのに、農家の方々は大変な苦勞をします。食べ物だけでははく、降り積もったヨナによる山汐もあります。阿蘇にとってヨナはまさに生活のすべてを脅かすものです。

しかしそんなヨナに対しても負けじと頑張っている人たちがいます。例えば田楽料理^{でんがく}です。京都の田楽料理は元々、茄子がその中心のようですが、阿蘇の田楽は里芋が中心です。「ツルノコイモ」という品種で、白くて首のところが少し曲がっているのが鶴の首に似ているのでそう呼ばれています。かつては阿蘇中でよく栽培され、家の囲炉裏や畑などでもよく味噌を塗って焼いていました。ところが戦後の高度経済成長期に阿蘇の暮らしも随分変わり、家から囲炉裏もなくなり、里芋の品種も改良され、小さくて硬く、首が曲がって不揃いなツルノコイモは扱いにくいと次第に姿を消していきました。そんな中、自分たちの労苦の象徴であるツルノコイモと田楽文化を残そうと立ち上がったのが高森町色見地区の人びとです。昭和35年に高森田楽保存会を結成し、消えかかった種芋を探し出し、現在の量までに復活させました。実は色見地区は阿蘇の中でも特にヨナの被害を受けやすい東部の地区で、もちろん畑は火山灰土壌で米を作るのは困難でした。しかし逆にこうした水はけのいい畑地はツルノコイモには向いていたのです。「ツルノコイモ」には、阿蘇の痩せた大地で生きる人びとの苦勞と開拓の精神が込められています。



田楽料理

寒冷地ならではの食文化

阿蘇でのんびり草を食む「あか牛（褐色和牛）」飼育も、実は厳しい自然環境に適した生業といえます。現在わが国の肉用牛はほとんどが黒牛ですが、阿蘇と四国の高知は貴重なあか牛生産地になっています。元々牛は4つの胃袋を持ち、食べた草が発酵する熱で寒さには強いのですが、あか牛は特に寒さや暑さに強く、粗食に耐え、また性格が大人しく放牧しやすいので厳しい阿蘇の大地にはとても適しています。もちろん阿蘇のあか牛たちも元々は農耕用でしたが、今では肉用として随分改良されてきました。阿蘇のあか牛は阿蘇の草原を守るものであると共に、今や阿蘇の厳しい自然がもたらした食文化となりました。また春になって野に放された牛たちは元気よく草原の草を食みますが、苦味のあるものは食べません。それで私たち人間は春になると、牛馬が食べ残してくれたゼンマイやワラビ、フキノトウなどの美味しい山菜を摘んで舌鼓を打つことができます。私たち人間も阿蘇の生態系の一部と考えることができます。

ゼンマイやタケノコといった春の味覚は期間限定ですが、それを日干しして乾燥させると長く保存することができます。冬の長い阿蘇では、食材を乾燥させたり、漬物にしたりする保存食の技術が発達しました。高菜・大根・人参・白菜などあらゆる野菜が漬物にされ、種



類も豊富なのは、冷蔵庫など保存機械もない時代の冬の暮らしを物語っています。また穀物を粉にして様々な形で料理することも阿蘇の主婦の腕の見せどころで、小麦粉からだご汁やうどん・饅頭・おやつなど何でも作りましたし、蕎麦もそばがきも皆よく食べていました。こうした製粉文化も寒い阿蘇では大変発達しました。

九州は焼酎造りの盛んな土地ですが、阿蘇では焼酎ではなく日本酒が造られています。これも阿蘇が大変寒い米の産地だからです（日本酒造りは東北地方など寒いところで盛んです）。日本酒を造るためには、酵母の発酵熱を抑える低温環境が欠かせません。また上質な米や清らかな水が手に入る必要があります。これらの条件を阿蘇が満たしていたのです。阿蘇の冬は大変長くて寒いですが、雪景色を見ながら温泉に入り、皆で囲炉裏を囲みながら新酒や田楽で一杯やる、そんな阿蘇ならではの生活も、厳しい自然に生きる醍醐味と言えるかもしれません。



おんだ祭り

ゾーンⅣ

エピローグ

中九州の地形を形づくってきた阿蘇の数十万年に及ぶ火山活動。

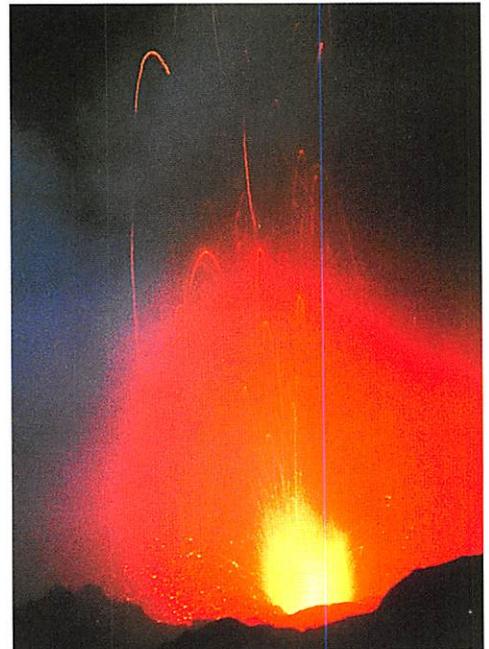
その活動は、人々を恐れさせる存在であり、様々な恩恵をもたらしてくれる存在、すなわち、神のすむ山として、崇められてきました。

そんな阿蘇には、歴史の奥深さ、雄大な自然や四季折々の景色などなど、私たちに惹きつける多くの魅力があります。

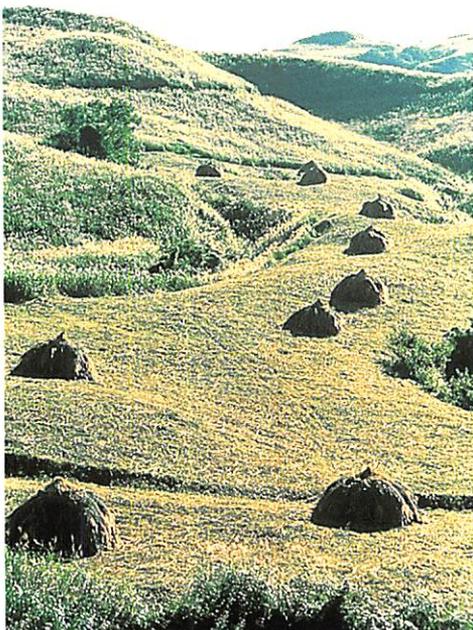
そんな阿蘇を再発見する旅にでかけてみませんか。



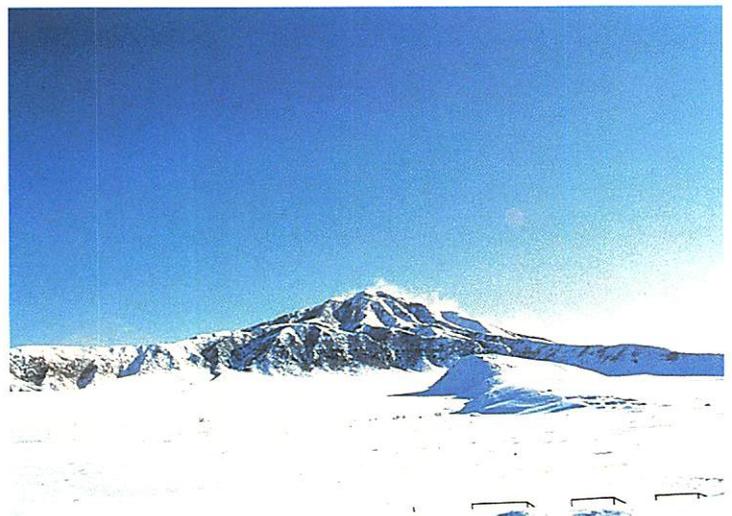
烏帽子岳のミヤマキリシマ (左上)
1993年のストロンボリ式噴火 (右上)



(阿蘇火山博物館提供)



秋の草原 (左下)
烏帽子岳と草千里ヶ浜 (右下)



関係略年表

年代	時代	今回取り上げた遺跡	阿蘇の様子	国内外の様子	
BC300 (約2,300年前)	弥生時代	狩尾方無田遺跡 地蔵原遺跡	阿蘇で稲作が始まる	環濠集落がつくられる このころ水稲耕作が始まる	
BC100					前期
0					中期
AD100	後期	狩尾遺跡群 下山西遺跡 下扇原遺跡 小野原A遺跡	鉄器の使用が広がる		
300	古墳時代 (飛鳥時代)	長目塚古墳 中通古墳群 迎平古墳群 平井古墳群	阿蘇で古墳が作られ始める		
400					前期
500					中期
600	後期	上御倉・下御倉古墳	阿蘇山の噴火の記述『隋書』倭国伝	645 大化の改新 646 大化の薄葬令 663 白村江の戦い 701 大宝律令	
700	奈良時代		阿蘇山神霊池の記述『筑紫風土記逸文』	710 平城京遷都 743 墾田永年私財法	
800	平安時代	二本木前遺跡 祇園遺跡	823 健甞龍命に従四位下の記述『日本紀略』 927 肥後国の四神の記述『延喜式』神名帳	794 平安京遷都	
1000			1181 南郷大宮司惟泰が菊池隆直とともに平家にそむく内容の記述『吾妻鏡』		
1200	鎌倉時代	浜の館	1195 北条時政が惟次の南郷の権利を認める内容の記述『阿蘇文書』	1192 源頼朝が征夷大将軍となる 鎌倉幕府を開く	
1300			1333 後醍醐天皇 阿蘇社の阿蘇郡及び甲佐・健軍・郡浦三末社の支配承認の記述『阿蘇文書』	1221 承久の乱 1274 元寇 1281	
1400	南北朝 室町時代		1369 大宮司惟武(南朝方)と大宮司惟村(北朝方)の対立する内容の記述『阿蘇文書』	1334 建武の新政 1338 足利尊氏が征夷大将軍となる	
1500			1451 惟歳が惟忠の養子となり、阿蘇大宮司統一の記述『阿蘇文書』	1393 南朝と北朝が合一する	
1600	戦国時代		1586～87 このころ浜の館焼失	1467 応仁の乱 1590 豊臣秀吉が全国を統一する 1600 関ヶ原の戦い	

ゾーンⅡ

コーナー1 神に仕えし大宮司

No.	資料名	遺跡名	数	時代・時期	指定等	出品協力者
1	三彩鳥型水注	浜の館	1	16世紀	重文	熊本県教育委員会
2	三彩鳥型水注	浜の館	1	16世紀	重文	熊本県教育委員会
3	三彩牡丹文瓶	浜の館	1	16世紀	重文	熊本県教育委員会
4	緑釉瓶	浜の館	1	16世紀	重文	熊本県教育委員会
5	緑釉陰刻牡丹文水注	浜の館	1	16世紀	重文	熊本県教育委員会
6	緑釉水注	浜の館	1	16世紀	重文	熊本県教育委員会
7	染付牡丹唐草文瓶	浜の館	1	16世紀	重文	熊本県教育委員会
8	白磁小置物(猿)	浜の館	1	16世紀	重文	熊本県教育委員会
9	白磁小置物(獅子)	浜の館	1	16世紀	重文	熊本県教育委員会
10	玻璃坏	浜の館	3	16世紀	重文	熊本県教育委員会
11	青磁合子	浜の館	1	16世紀	重文	熊本県教育委員会
12	黄金延板	浜の館	1	16世紀	重文	熊本県教育委員会
13	白磁碗	二本木前遺跡	1	12世紀		熊本県教育委員会
14	白磁皿	二本木前遺跡	1	12世紀		熊本県教育委員会
15	白磁皿	二本木前遺跡	1	12世紀		熊本県教育委員会
16	白磁皿	二本木前遺跡	1	12世紀		熊本県教育委員会
17	土師器皿	二本木前遺跡	1	12世紀		熊本県教育委員会
18	木筒	二本木前遺跡	1	12世紀		熊本県教育委員会
19	差歯下駄	二本木前遺跡	1	12世紀		熊本県教育委員会
20	連歯下駄	二本木前遺跡	1	12世紀		熊本県教育委員会
21	折敷	二本木前遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
22	箸	二本木前遺跡	4	12世紀		熊本県教育委員会
23	漆器碗	二本木前遺跡	2	12世紀		熊本県教育委員会
24	漆器皿	二本木前遺跡	1	12世紀		熊本県教育委員会
25	木製碗	二本木前遺跡	6	12世紀		熊本県教育委員会
26	須恵質搦鉢	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
27	須恵質捏鉢	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
28	須恵質捏鉢	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
29	須恵質捏鉢	祇園遺跡	1	14世紀～15世紀		熊本県教育委員会
30	土師器皿・杯	祇園遺跡	14	14世紀		熊本県教育委員会
31	瓦質火鉢	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
32	瓦質火鉢	祇園遺跡	1	13世紀～14世紀		熊本県教育委員会
33	藁槌	二本木前遺跡	1	14世紀～15世紀		熊本県教育委員会
34	鍬	二本木前遺跡	1	12世紀～13世紀		熊本県教育委員会
35	鍬	二本木前遺跡	1	12世紀～13世紀		熊本県教育委員会
36	石鍋	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
37	滑石製仏像	祇園遺跡	1	14世紀～15世紀		熊本県教育委員会
38	滑石製人形	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
39	滑石製スタンプ	祇園遺跡	1	14世紀～15世紀		熊本県教育委員会



No.	資料名	遺跡名	数	時代・時期	指定等	出品協力者
40	滑石製温石	祇園遺跡	2	13世紀		熊本県教育委員会
41	滑石製紡錘車	祇園遺跡	1	—		熊本県教育委員会
42	滑石加工品(蓋)	祇園遺跡	3	—		熊本県教育委員会
43	滑石加工品	祇園遺跡	1	—		熊本県教育委員会
44	磁州窯系鉄絵壺	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
45	白磁碗	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
46	白磁碗	二本木前遺跡	1	12世紀～13世紀		熊本県教育委員会
47	白磁碗	祇園遺跡	4	13世紀		熊本県教育委員会
48	白磁皿	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
49	白磁皿	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
50	白磁皿	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
51	龍泉窯系青磁坏	祇園遺跡	1	—		熊本県教育委員会
52	龍泉窯系青磁碗	祇園遺跡	1	—		熊本県教育委員会
53	龍泉窯系青磁坏	祇園遺跡	1	14世紀		熊本県教育委員会
54	龍泉窯系青磁碗	祇園遺跡	1	14世紀		熊本県教育委員会
55	龍泉窯系青磁碗	祇園遺跡	1	14世紀		熊本県教育委員会
56	龍泉窯系青磁碗	祇園遺跡	4	14世紀～15世紀		熊本県教育委員会
57	同安窯系青磁碗	祇園遺跡	2	14世紀～15世紀		熊本県教育委員会
58	龍泉窯系青磁皿	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
59	同安窯系青磁皿	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
60	同安窯系青磁皿	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
61	同安窯系青磁皿	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
62	龍泉窯系青磁小壺	祇園遺跡	1	14世紀～15世紀		熊本県教育委員会
63	越州窯系青磁小壺	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
64	青白磁梅瓶	祇園遺跡	3	13世紀		熊本県教育委員会
65	合子(蓋)	祇園遺跡	1	12世紀～13世紀		熊本県教育委員会
66	合子(蓋)	祇園遺跡	1	12世紀～13世紀		熊本県教育委員会
67	合子(蓋)	祇園遺跡	3	12世紀～13世紀		熊本県教育委員会
68	合子(身)	祇園遺跡	2	13世紀		熊本県教育委員会
69	黄釉盤	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
70	青磁盤	祇園遺跡	4	14世紀～15世紀		熊本県教育委員会
71	二彩盤	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
72	黄釉四耳壺	祇園遺跡	4	13世紀		熊本県教育委員会
73	褐釉四耳壺	二本木前遺跡	1	12世紀～13世紀		熊本県教育委員会
74	白色土師器皿	祇園遺跡	2	14世紀～15世紀		熊本県教育委員会
75	白色土師器皿・坏	祇園遺跡	2	13世紀		熊本県教育委員会
76	白色土師器皿	祇園遺跡	3	12世紀		熊本県教育委員会
77	白色土師器碗	祇園遺跡	1	14世紀～15世紀		熊本県教育委員会
78	天目茶碗	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
79	天目茶碗	祇園遺跡	1	14世紀～15世紀		熊本県教育委員会
80	褐釉茶入	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会

No.	資料名	遺跡名	数	時代・時期	指定等	出品協力者
81	青白磁水注	祇園遺跡	2	12世紀		熊本県教育委員会
82	白磁水注	祇園遺跡	1	12世紀		熊本県教育委員会
83	白磁水注	祇園遺跡	1	13世紀		熊本県教育委員会
84	茶入	—	1	—		山崎新教氏

コーナー2 権勢の源流

No.	資料名	遺跡名	数	時代・時期	指定等	出品協力者
85	内行花文鏡	長目塚古墳	1	古墳時代中期		阿蘇神社
86	勾玉	長目塚古墳	1	古墳時代中期		阿蘇神社
87	勾玉	長目塚古墳	1	古墳時代中期		阿蘇神社
88	勾玉	長目塚古墳	1	古墳時代中期		阿蘇神社
89	管玉	長目塚古墳	1	古墳時代中期		阿蘇神社
90	丸玉	長目塚古墳	3	古墳時代中期		阿蘇神社
91	刀子	長目塚古墳	8	古墳時代中期		阿蘇神社
92	直刀	長目塚古墳	2	古墳時代中期		阿蘇神社
93	直刀	迎平古墳	1	古墳時代中期		阿蘇神社
94	直刀	平井古墳	2	古墳時代中期		阿蘇神社
95	鉄鏃	長目塚古墳	2	古墳時代中期		阿蘇神社
96	画文帯神獸鏡	迎平六号墳	1	古墳時代中期		熊本県教育委員会
97	馬具	平井古墳	3	古墳時代中期		阿蘇神社
98	馬具	塩塚古墳	4	古墳時代中期		熊本県教育委員会
99	内行花文鏡	下山西遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
100	ガラス製勾玉	下山西遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
101	勾玉	下山西遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
102	破鏡	狩尾湯の口遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
103	石包丁	下山西遺跡	3	弥生時代後期		熊本県教育委員会
104	弥生土器	小野原A遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
105	弥生土器	小野原A遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
106	弥生土器	小野原A遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
107	弥生土器	小野原A遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
108	弥生土器	小野原A遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
109	弥生土器	小野原A遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
110	弥生土器	小野原A遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
111	弥生土器	小野原A遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
112	弥生土器	小野原A遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
113	弥生土器	小野原A遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
114	弥生土器	小野原A遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
115	弥生土器	小野原A遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
116	弥生土器	小野原A遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
117	弥生土器	小野原A遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
118	銅釦	下扇原遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会

コーナー3 赤き土、硬き鉄

No.	資料名	遺跡名	数	時代・時期	指定等	出品協力者
119	丹塗土器(筒形器台)	地蔵原遺跡	1	弥生時代中期		熊本県教育委員会
120	丹塗土器(甕)	地蔵原遺跡	1	弥生時代中期		熊本県教育委員会
121	丹塗土器(甕)	地蔵原遺跡	1	弥生時代中期		熊本県教育委員会
122	丹塗土器(壺)	地蔵原遺跡	1	弥生時代中期		熊本県教育委員会
123	丹塗土器(壺)	地蔵原遺跡	1	弥生時代中期		熊本県教育委員会
124	丹塗土器(小型壺)	地蔵原遺跡	1	弥生時代中期		熊本県教育委員会
125	丹塗土器(注口脚付小型壺)	地蔵原遺跡	2	弥生時代中期		熊本県教育委員会
126	丹塗土器(小型壺・蓋)	地蔵原遺跡	3	弥生時代中期		熊本県教育委員会
127	丹塗土器(高坏)	地蔵原遺跡	1	弥生時代中期		熊本県教育委員会
128	丹塗土器(高坏)	地蔵原遺跡	1	弥生時代中期		熊本県教育委員会
129	鉄鍬	下山西遺跡	17	弥生時代後期		熊本県教育委員会
130	鉄鍬	狩尾湯の口遺跡	7	弥生時代後期		熊本県教育委員会
131	鉄鍬	狩尾池田・古園遺跡	8	弥生時代後期		熊本県教育委員会
132	鉄製手鎌	下山西遺跡	3	弥生時代後期		熊本県教育委員会
133	鉄製手鎌	狩尾池田・古園遺跡	2	弥生時代後期		熊本県教育委員会
134	鉄製手鎌	狩尾湯の口遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
135	鉄鎌	下山西遺跡	2	弥生時代後期		熊本県教育委員会
136	鉄製鍬先又は鋤先	下山西遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
137	鍬	狩尾湯の口遺跡	2	弥生時代後期		熊本県教育委員会
138	鍬	狩尾池田・古園遺跡	3	弥生時代後期		熊本県教育委員会
139	鍬	下山西遺跡	5	弥生時代後期		熊本県教育委員会
140	刀子	狩尾湯の口遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
141	刀子	狩尾池田・古園遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
142	刀子	下山西遺跡	4	弥生時代後期		熊本県教育委員会
143	鉄斧	狩尾湯の口遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会
144	鉄斧	狩尾池田・古園遺跡	2	弥生時代後期		熊本県教育委員会
145	鉄斧	下山西遺跡	1	弥生時代後期		熊本県教育委員会

ゾーンⅢ 阿蘇の魅力

No.	資料名	地域	数	年代	指定等	出品協力者
146	火山弾	阿蘇中岳	1	—		阿蘇火山博物館
147	火山弾	伊豆大島	1	1986年		阿蘇火山博物館
148	火山灰	阿蘇中岳	3	—		阿蘇火山博物館
149	さまざまな溶岩	阿蘇中岳火口丘群	7	—		阿蘇火山博物館
150	さく葉標本	—	12	—		熊本県文化企画課
151	昆虫標本	—	24	—		熊本県文化企画課
152	液浸標本	—	4	—		熊本県文化企画課
153	剥製	—	14	—		熊本県文化企画課

【主要参考文献】

- 熊本県教育委員会 1962 『阿蘇長目塚』(熊本県文化財調査報告集第3集)
 熊本県教育委員会 1977 『浜の館』(熊本県文化財調査報告集第21集)
 熊本県教育委員会 1980 『塩塚古墳』(熊本県文化財調査報告書第46集)
 熊本県教育委員会 1980 『古坊中』(熊本県文化財調査報告第49集)
 熊本県教育委員会 1987 『下山西遺跡』(熊本県文化財調査報告集第88集)
 熊本県教育委員会 1993 『狩尾遺跡群』(熊本県文化財調査報告集第131集)
 熊本県教育委員会 1998 『二本木前遺跡』(熊本県文化財調査報告集第167集)
 熊本県教育委員会 2000 『祇園遺跡』(熊本県文化財調査報告集第188集)
 熊本県教育委員会 2004 『地蔵原遺跡』(熊本県文化財調査報告集第220集)
 隈 昭志 1999 『長目塚と阿蘇国造』一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書1
 阿蘇品保夫 1999 『阿蘇社と大宮司』一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書2
 渡辺一徳 2001 『火山の地形の生い立ち』一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書7
 田中伸廣 2000 『阿蘇の名水』一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書8
 今江正知編 2001 『自然と生き物の讃歌』一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書9
 大滝典雄 1997 『草原と人々の営み』一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書10
 佐藤征子 1998 『神々と祭の姿』一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書11
 阿蘇町史編さん委員会編 2005 『阿蘇町史 第一巻 通史編』
 阿蘇町史編さん委員会編 2004 『阿蘇町史 第二巻 資料編』
 長陽村史編纂委員会 2004 『長陽村史』
 中世土器研究会編 1995 『中世の土器・陶磁器』真陽社
 小野正敏編 2001 『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会
 新・熊本の歴史編纂委員会編 1979 『新・くまもとの歴史3 中世』熊本日日新聞社
 熊本史談会編 1988 『肥後の民話と伝説』葦書房
 湯浅陸雄 2005 「草原の営みー草原の維持管理に関わる人びとの姿」
 『谷人』13号 阿蘇たにびと博物館
 竹島真里 2004 「あか牛を食べて守り継ぐ阿蘇の大草原と名水の水源」
 現代農業増刊『おとなのための食育入門』農山漁村文化協会
 梶原宏之他編 2001 『目で見る菊地・阿蘇の100年』郷土出版社
 松岡正剛編 2003 『阿蘇遺産』財団法人阿蘇地域振興デザインセンター
 熊本編集委員会編 1987 『聞き書 熊本の食事』日本の食生活全集43 社団法人農山漁村文化協会
 熊日編集局編 1987 『新・阿蘇学』地域学シリーズ1 熊本日日新聞社

【協力機関及び協力者】

井 博視	池浦 秀隆	池辺伸一郎	梶原 宏之	蔵本 厚一	嶋田 徳生
島津 義昭	鋤柄 俊夫	友岡 哲郎	古森 政次	藤丸 知加	松岡 祐作
松井 英司	水野 哲郎	山崎 新教	山本 豊	山鷲 仁	吉川美由紀

阿蘇火山博物館
 阿蘇たにびと博物館
 熊本県地域振興部文化企画課博物館プロジェクト班
 熊本県立美術館
 南阿蘇村教育委員会

阿蘇市
 株式会社日本リモナイト
 熊本県立矢部高等学校
 山都町教育委員会

阿蘇神社
 熊本県環境生活部自然保護課
 熊本県立阿蘇清峰高校
 熊本日日新聞社
 (50音順 敬称略)

熊本県立装飾古墳館

平成17年度後期企画展示

肥後の至宝展Ⅳ

神のすむ郷 阿蘇のものがたり展

～あなたは阿蘇をご存じですか？～

発行日：2006年1月24日

編集・発行：熊本県立装飾古墳館

〒861-0561 熊本県山鹿市鹿央町岩原3085番地

TEL:0968-36-2151 FAX:0968-36-2120

印刷：株式会社 協和印刷

〒868-0408 熊本県球磨郡あさぎり町免田東1496番地20

TEL:0966-45-1119 FAX:0966-45-1213

印刷仕様

版型/A4版

頁数/72頁

組版/フォント(10.3ポイント 明朝基本)

印刷/オフセット印刷

製版/スクリーン線数200線で製版

用紙/表紙(スーパーアート4/6判200kg)

本文(上質コート4/6判110kg)

製本/左無線綴じ

平成17年度後期企画展示
肥後の至宝展Ⅳ



熊本県立 装飾古墳館

この電子書籍は、熊本県立装飾古墳館 企画展図録 第19集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：神のすむ郷 阿蘇のものがたり展

発行：熊本県立装飾古墳館

〒861-0561 熊本県山鹿市鹿央町岩原 3085 番地

電話：0968-36-2151

URL：<http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2018 年 6 月 1 日